

「毛沢東<sup>コンプレックス</sup>情結」と「北京<sup>コンプレックス</sup>情結」  
——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）

夏 剛

20世紀中国の四半世紀<sup>ごと</sup>毎の歴史的な転換に伴う政治・地縁的な勢力地図の変化

21世紀初頭に英国の『オックスフォード辞典』（同大学出版局）が実施した使用頻度の分析<sup>1)</sup>に拠ると、新聞・雑誌・ブログ・小説等に使われた英語の名詞の中で、1位と2位を占めたのはtimeとpersonである。人間が時間の制約を受けるといふ現実が浮き彫りに成った興味深い結果は、言語と意識の相互反映・対応の関係を示唆する。人間関連の名詞群に於けるman, child, womanの順（<sup>それぞれ</sup>其々7位, 12位, 14位）は、男女平等が世界で未だ普遍的な実現には程遠い現実と暗合する。「history = his story」（歴史＝彼の物語）という民間語源説が示す男性上位の伝統は、謀らずも根強さを改めて顕わしている。

personの通常の複数形のpeopleが上位に見当たらないのも、集団の時代から個人の時代への変容の証と取れる反面、孟子が言う「天下之本在国、国之本在家、家之本在身」（天下の本は国に在り、国の本は家に在り、家の本は身に在る）と妙に符合する。身を究極の本とする自己本位・唯物論の発想は、身体のpart（11位）のhand, eyeの上位（10位, 13位）が示す様に、英語や英語圏文化の深層にも見受けられるわけである。この2語と交錯するman, womanの産物であるchildは家の後裔に他ならないが、<sup>パーツ</sup>身体部位の後に出て国家の前に来る位置は儒教の亜聖の命題と吻合する。

社会の集団・組織・機構関連の名詞で上位25位に入ったのは、government, companyとgroup（20位, 21位, 23位）である。国家と会社の通底や政治支配と企業統治の同根性を思わせるこの群の中で、企業も集団・仲間も政府の後に来るのは、world（8位）の基本単位を成す国家の存在・権勢の大きさを窺わせる。1-100位の他の3/4の語彙を見渡すと、warが49位に在りpeaceが無いのも時代の縮図の様に映り、戦争の陰影が濃く残っており平和への

道程が遠いという状況を如実に物語っている。

上位 1/4 の中の time の関連語は、3 位の year、5 位の day と 17 位の week である。年、日の次が歳月・月日の基幹の月 (month) ならぬ週であるのは、金銭を表わす色々な語彙 (cash 等) の存在に因り、「時は金なり」(Time is money) の等式に有る money が 65 位に過ぎないのとも通じようが、隣接の 16 位の work 及び 9 位の life の常用周期が思い当る。一方、hour と minute の順位の相対的な低さは、時に分刻みまで拘る日本的な律儀さの強迫観念とは対照的な、交通機関も余り定刻を厳守しない英語圏社会の大らかさに似合う。秒を指す second は second minute (第 2 の分) に由来したが、分も此処で二の次の部類に入るわけである。

time の時・時代の両義 (後者は通例複合語で、屢々～s の形) は、中・日で別々の言葉に成るが、時間の数え方の相違は中国と日本の間でも見られる。例えば、hour に当る日本語の「時間」は time の対応でもあるが、中国語の「小時」に比べて時間観念の規模の差が感じられる。或いは、half an hour や該当の中国語の「半小時」を言う「半時間」は、二葉亭四迷訳「あいびき」(1888。[露西亜] ツルゲーネフ『獵人日記』[1847-52] 所収の短編小説) 等に出たものの、遂に定着せず『広辞苑』(新村出編、岩波書店、1955-) にも載っていない<sup>2)</sup>。更に、quarter も日本語で「15 分」と訳され、中国語の「一刻 (鐘)」の様な単位には至っていない。

日本流の時間の中で分は言わば second hour の性質を持ち、逆に中国では 15 分、30 分を小さな刻み、半端な長さとして捉えがちである。漏刻 (水時計) の漏壺内の箭に施した刻みから来た「刻」は時間の単位やその基準として、元来 1 昼夜の 1/48 を指し 1 刻は 1 時の 1/4 を表わす (日本では又、1 刻は昔 1 時 [約 2 時間] の 1/4)。4 刻で 1 時と成る発想から中国では今も「○点 3 刻」(○時 30-45 分) の言い方が有り、quarter の「毎正時前・後の 15 分」よりも行き届いている。欧州では 13 世紀末に機械時計が出現し、16 世紀末には 15 分毎及び 1 時間毎に鳴る仕掛けが出来た<sup>3)</sup> が、時が刻一刻と過ぎて行くのを告げる strike the quarters (「時計が」15 分を打つ) は、中国でも同様であり「刻 = second hour」の見方が裏付けられる。

日本の時刻制度は平安時代が「定時法」(使用は宮城内とその周辺に限られた)、時計の管理も出来ない戦国時代には乱れてしま<sup>しま</sup>い、江戸時代には「不定時法」に変わり、明治時代には太陽暦の導入に伴う「定時法」が定着した<sup>4)</sup>。17 世紀中期から 18 世紀の徳川の泰平の世に全国で数万箇所の時鐘に由る時報体系<sup>システム</sup>が構築された<sup>5)</sup> が、1872 年 9 月 12 日 (西暦 = 10 月 14 日) の鉄道開通 (新橋-横浜間)、及び同年 12 月 3 日 (西暦 = 1873 年元旦) からの新暦実施で分単位の時間感覚が普及したが、その前に人々が慣れてきた時間単位の軸は大雑把な「1 刻」(約 [本段落で以下同] 2 時間) である<sup>6)</sup>。昼 (日の出一日没)・夜 (日没一日の出) の其々 6 等分の 1 に当り、季節によって長さが違うこの概念を基とした時間の割り方では、「半刻」(1 時間)、<sup>こはんとき</sup>「小半刻」(30 分) に次ぐのは「四半刻」(15 分) だった。

1 年の 1/4 を指す quarter は中国と日本では其々、「季度」と「四半年 / 期・一季 / 期」の対

「毛沢東情結」<sup>コンプレックス</sup>と「北京情結」<sup>コンプレックス</sup>——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）（夏

応が付く。『広辞苑』第1版の「四半」には「一年」「一期」等の複合語が有り、第4版（1991）から「一斤」が消え「一世紀」が登場し、「四半世紀」は第6版（2008）で単独の項と成った（小学館『日本国語大辞典』第2版第6巻[2001]にも、第1版第10巻[1974]に無い[“四半・織半”の項にも用例が出ない]この項が設けられたが、出典の記載や用例は無い）。a quarter of a century の日本語訳の定着に比べて、中国語訳の「4分之1世紀」は普及の歴史も馴染み度もやや浅い。「半世紀」の概念を共有する両国のこの差は、10年毎の年代を100年の中の区切りとし、1世紀を精々2つに分ける中国的な感覚に帰せよう。因みに、中国語から日本語に入った「半百」（百の半分。50[歳]）も、平安—江戸時代の用例を数々残していながらも、何時の間にか死語と化した<sup>7)</sup>。

「半百」の半分に当る25年間の一纏まりの概念の滲透は、日本的な「縮小・凝縮・濃縮」志向<sup>8)</sup>と波長が合う節も有るかも知れず、中国語で「一半」と言う和製語彙の「半分」にも細分化の習性が投影されている<sup>9)</sup>。対して、中国の熟語の「年過半百」（幕末の「狂歌・近世商賈尽狂歌合」[1852]に出た「年は半百に過たり」）は、死後を婉曲に表わす雅語「百年之後」（百年の後）と合わせて、限界寿命の100歳までの長生を願う「肉食系」的な貪欲さが根底に漂う。[漢代]無名氏の「生年不滿百，常懷千歲憂」（生年は百に満たず，常に千歳の憂いを懐く）や，杜甫の「万里悲秋常作客，百年多病独登台」（万里悲秋 常に客と作り，百年多病 独りに登る）にも，広漠たる風土や悠久な歴史に根付く中国的な人生観・世界観の開闊さ・壮大さが窺える。

100歳以上の超長寿老人の白骨遺体の露見や戸籍上の虚偽「存命」等が続々と報じられた2010年の夏，終戦65周年の日の『読売新聞』に宗教思想家・山折哲雄の時評が掲載された。その中で恰度100年前に刊行された民俗学者・柳田国男の『遠野物語』を持ち合いに出して，岩手県遠野に伝えられた神話・伝承・民話・口碑を集めたこの作品の中の「神隠し」を取り上げ，少年や老人等が何者かに攫われて村から姿を消した異常現象を今度の変事と二重映しにした。更に，平成の高齢社会の「人生80年」の死生観と昭和後期までの「人生50年」の生活感覚を比較し，織田信長が「人間五十年，下天の内をくらぶれば」と言って自刃して以来，約4世紀の間に人生50年で万事済ませて来たが，現在の人口学の知見では江戸時代後期の平均寿命はほぼ50年だったとも言う，と述べた<sup>10)</sup>。

小泉純一郎は慶応大学在学中の1965年（23歳）に文集に発表した随筆「死のうは一定！」の中で，「人間五十年/化転の内をくらぶれば/夢幻の如くなり/一度生を得て/滅せぬ者のあるべきか」という幸若舞「敦盛」の1節を謳った織田信長の，乾坤一擲の見事な気魄・凄絶な雄々しい感情・男らしい爽快さに強く魅せられたと綴った<sup>11)</sup>が，40年後の夏の郵政民営化を巡る「我が闘争」で顕示した山師<sup>ギャンブラー</sup>ぶりにもその心象風景が投影された。平成の首相の頻繁な交代（鳩山由紀夫[2009年9月16日-10年6月8日在任]までの21年半弱は15人）も，和製

漢字の「儂」の字形・語義の通り「人生は夢幻」の無常を地で行っている様だ。

衆議院解散時に議長が詔書を読み上げ解散を宣言した瞬間に議員が総立ちに成り万歳三唱する慣例は、天皇及びその国事行為への敬意の他に失職の自暴自棄や選挙戦突入の気合い・縁起担ぎが理外の理である。英語に有る極少数の日本由来の外来語の1つである **banzai** は「万歳」の本来の意味以外に、大戦末期の日本軍の自殺的な「万歳突撃」<sup>バンザイ・アタック</sup> に因んで形容詞として「無謀な」の使い方も有る。長寿を祈る「天皇陛下万歳」の略が軍国主義時代に万死を辞さぬ千万の将兵の玉砕の絶叫に使われたのは、奇妙にも中国語の「万歳・万碎」の同音 (wansui) に暗合する満開・虚無の同居を思わせる。

中国流の「長命百歳」(百歳まで長生きするよう)の祝辞が日本で流行らないのも合点が行くが、その固定観念の遺伝子<sup>D N A</sup>を植え付けた江戸時代の265年はこの文脈で「四半千年」と思えて来る。中国史の途轍も無く長い回廊に於ける **quarter** の道標として、先ず千年の1/4の250年が思い浮かぶ。最も長く維持した唐, 明, 清3王朝の寿命(290年, 277年, 276年)は、千年の1/4-1/3の midpoint (291年)に近い。その超長期の視野から四半世紀の単位を見ると、正に1時間の1/4の「1刻」の観も無くはない。但し、25年を節目に20世紀の中国を振り返れば、ほぼ四半世紀毎に起きた大きな転換を再認識できる。

初めに、世紀の交の1900年、8ヶ国聯軍の侵攻で北京が陥落し皇帝・朝廷が西安まで逃走し、翌年に11ヶ国との不平等条約を呑まされ、2度の鴉片戦争敗北(1842, 60)以来の最大の国辱を喫した。

次に、中華民国「国父」・孫文の逝去(1925)を経て、1927年に国民革命軍総司令・蒋介石が上海で共産党肅清の軍事政変を起こし、南京で国民党政権を発足させた。

更に、1949年に北京で中華人民共和国が成立し、翌年に共産党政権が朝鮮戦争への参戦に踏み切り、政治・軍事優先の針路を決定付け、経済建設の落後と国際社会での孤立を招いた。

続いて、建国26周年を過ぎた1976年に、周恩来・朱徳・毛沢東が1-9月に相継いで逝き、4月の天安門事件の大衆鎮圧に対する反転の様に、10月に「4人組」が逮捕され「文革」が終焉を迎えた。

最後に、新千年の直前の1999年に、鄧小平逝去(97年2月18日)直後の香港返還(7月1日)に続いて、澳門の返還を以て世紀単位(99年, 442年)の雪辱を果たし、平和的な勃興への道を一層広げた。

「天時不如地利, 地利不如人和」(天の時地は地の利に如かず, 地の利は人の和に如かず), という孟子の名言は人, 地, 時の優位順を説いたが、上記の英語名詞の使用頻度では先ず時, 人が出て地が後に付く。4位の **way** の空間的な要素に即して(以下の括弧の中の **number** [22位] は順位), 各 **case** (18) の **place** (15) に注目し, **thing** (7) の **point** (19) を整理すると, 様々な **fact** (25), **problem** (24) に気が付く(上位25語はこれで出尽くした)。

1911年の辛亥革命によって大清帝国は忽ち崩壊したが、8カ国聯軍の最大の標的と成った古都・北京は、中華民国の初期にも政治の中心であり続けた。臨時首都・南京に居た臨時大統領・孫文の妥協で、政権は勢力基盤の北京に都を構える袁世凱に譲渡され、北洋軍閥の支配下の北京政府は1928年に始めて消滅した。

共産党の見解では中国の現代史の起点は1919年に北京で起きた「5.4運動」とされるが、同年のもう1つの重要な転換点は、孫文が10月10日（建国記念日）に国民党を創建した事である。2年後に同じ広州で樹立した革命政府は1926年、国共合作の下で北伐を開始したが、中共誕生（1921）の地・上海での1927年「4.12反共政変」の6日後に南京で国民政府が成立し、1月に広東から辛亥革命の地・湖北省武昌に移った政府を8月に合併・吸収した。北京落城・北伐完了と全国統一を遂げた翌年の6月－12月の間に、前年に首都と定めた南京で国民政府が10月に治国の大権の総攬を宣言し、行政・立法・司法・考試（人事）・監察5院から成る政府の主席に蒋介石が就任した。皮肉にも北京で他界した孫文の遺恨はこの回転で漸く晴れたが、蔣政権が依拠する財閥や英米の実力・影響力が江蘇・上海・浙江で強い事も大きい。

南京は1368年に太祖・朱元璋の意思で明の初代の首都と成ったが、靖難の変を制した朱棣が永楽帝として即位した翌年（1403）、国都は北平に改められた（実際の遷都は1421年）。割拠時代も含む史上歴代の南京政権はほぼ短命に終わったが、蒋介石もこの「魔呪」（ジンクス）を打破できなかった。1949年に共産党が北京を都に選んだのは、長命王朝の伝統の遺伝子と盟友・ソ連に近い利点が要因であった<sup>12)</sup>。奇しくも抗日戦争中の党中央が駐在した陝西省延安地区から、李自成が農民反乱軍を率いて1644年に北京を占領し「大順国皇帝」を41日間務めたが、人類の1/4を占める中国人民の立ち上がりを毛沢東が宣言した開国大典は、国体・首都変更の意味でも時計の振り子の揺れ戻しや歴史の螺旋状の上昇の徴<sup>しるし</sup>と思える。

明、清の1割相当の27年に及んだ毛の治国の終結後、紫禁城内の中南海で「4人組」が電撃逮捕された。春の「4.5運動」に対する首都民兵の血腥い痛撃とは逆に、「宮廷政変」の誇りを受けたこの荒療治は無血で済んだが、「4人組」の本拠地・上海で大権を握る徒党や「第2の武装」民兵が反逆しなかったのは奇跡に近い。上海は1927年に激動の「台風の目」と成って以来、第2の中心として再び存在感を高めた。

「4人幫（組）」の別称・「上海幫（閥）」は巡り巡って、世紀の交<sup>こ</sup>の2000年前後に新種が現れた。1989年「6.4事変」後から2002年の第16回全国党大会まで総書記を務めた江沢民は、上海市党委員会書記から大抜擢されたのである。時の上海市長・朱鎔基は1992年に3階級特進で党中央候補委員から政治局常務委員に昇進し、1998－2003年に国务院総理を務めた。上海で大出世を果たした江と朱は江蘇省揚州市、湖南省長沙市の出身であるが、朱の前任総理（1987－98）・李鵬も江の後任総書記・胡錦濤も、他ならぬ上海の生まれ（原籍<sup>13)</sup>は其々重慶市と安徽省績溪县）である。江の上海時代の部下で中央入りした「新上海閥」は、世界の一大成長地

区に躍進した上海の実力に相応しい権勢を江の引退後も保って来た。

建国から2012年の第18回党大会までの指導部は、其々毛・鄧・江・<sup>かしら</sup>が頭を成す4世代に分けられている。第2→第3世代の権力移行の完遂を宣言した第14期第4回中央総会（1994年9月）の翌年、域外<sup>14)</sup>で「北京閥」と呼ばれる政治勢力は壊滅的な打撃を受けた。2月に摘発された汚職事件を契機に、先ず周冠五（首都鋼鉄総公司<sup>グループ</sup> [集団] の長年の党・行政総帥、冶金工業部副部長 [次官] 等を歴任）と息子・周北方（首都鋼鉄総公司助理総経理 [社長補佐]、中国首鋼国際貿易工程公司総経理 [社長]、首長国際企業有限公司<sup>15)</sup> 理事会主席 [会長]）が失脚し（前者は定年離職の形で体面を保ち、後者は96年に収賄罪等で死刑 [猶予2年付き] に処された）、4月に北京市常務副市長・王宝森（60歳）が法の裁きを畏れて拳銃自殺を遂げ（口封じの為に強制された説も有り<sup>16)</sup>）、北京市党委書記・陳希同は辞任に追い込まれた上で公職・党籍を剥奪され、汚職・瀆職の罪で98年に懲役16年の刑が下された。周は全国優秀企業家として経営請負制の導入と首都の改革・開放を推進し鄧小平の厚い信頼を受けたが、鄧の次男・質方（首長四方 [集団] 有限公司総裁<sup>17)</sup>）も巻き込まれて表舞台から姿を消し、鄧一族の威光は急速に衰えた。

政治局委員が法的に断罪・投獄された結末は、1981年の林彪・江青「反革命集団」特別裁判以来の事であるが、横領・女色絡みの醜聞が裁判沙汰に成ったのは前代未聞である。綱紀肅正の大義名分の下で前代首領の影響力を削ぐ処理は、江沢民の中央軍事委員会主席退任・完全引退（2003）の3年後に反転の形で再演された。「上海閥」の急先鋒・陳良宇（上海市党委書記）が同市社会保険基金事件で免職され、隔離審査（軟禁）を経て翌07年に収賄・職権濫用の容疑で逮捕され、08年に懲役18年を言い渡された。奇妙な事に、この司法審理は天津市党委政法委員会の主導の下で、北京・上海に次ぐ第3の直轄市・天津の第2中級人民法院（地方裁判所）で進めたのであり、経済疑獄の舞台と成る上海の数人の高官や企業家は吉林の省都・長春市で裁かれた。中央は上海に対する整頓・改組の「大手術」の一環として、陝西・江蘇から武装警察部隊を派遣し盤根錯節の当地人脈の結託に手術刀を入れたが、陳の後任に充てられた習近平の原籍も陝西省の富平県である。

習の浙江省党委書記・省長代理からの転任は横滑りではなく、政治局常務委員会入りへの2段跳びの助走であった。2007年10月の第17回党大会で第5世代の首領の最有力候補として、15年前の朱鎔基と同じく登龍門・上海から一躍「昇天」したが、8月の陳良宇逮捕の前の6月に「上海閥」の重鎮・黄菊が病死した。彼は朱の後任の上海市長（1991-95）、陳の前任の市党委書記（1994-2002）を経て、政治局常務委員・筆頭副総理の座に就いたが、その消失は江の上海時代からの懐刀・曾慶紅（政治局常務委員・国家副主席）の引退と共に、物理的な基地から遊離した「上海閥」の勢力の退潮を意味する。9人体制を維持した新しい政治局常務委員会の面々には、江派の「上海閥」対胡派の「共青（共産主義青年団）閥」の拮抗が相変わらず取

り沙汰されているが、権力地図の塗り替えの反面に意外な虚実や異同が見て取れる。

## 「太子党 vs. 共青閥」の構図と「上海閥・北京閥・山東閥」の通説の幻影と正体

マルクス、エンゲルスの『共産党宣言』（1848）の冒頭に曰く、「欧州には幽霊が出没している——共産主義の幽霊が。古い欧州の全ての権力が、この幽霊を退治する為に神聖な同盟を結成している。」101年後に建国した中共政権に関しても、疑心暗鬼や過剰反応を招き易い「閥」の幻影の独り歩きが儘有る。「新上海閥」の喧騒で取り上げられた諸公を点検すると、一枚岩の神聖な同盟でない事は明白であり、域外で訝られた曾慶紅の胡錦濤側への「寝返り」も不思議ではない。江沢民寄りとされる上海時代の腹心と中央入り後の「忠臣」には、上海勤務経験の有無に関らず上海出身の者は減多にない（曾慶紅＝江西，呉邦国＝安徽，黄菊・陳良宇＝浙江，賈慶林＝河北，李長春＝遼寧，周永康＝江蘇，劉雲山＝山西，陳至立＝福建）。「北京閥」の陳希同も鄧小平と同じ四川の人で、疑獄の渦に引っ掛かった周冠五は建国後ずっと首都に在籍したが、出身は山東なのである。強いて言うなら、1953年生まれで周北方は多くの建国後出生の「太子党」（高級幹部の子弟）の様に、居住・勤務地とも親に従って首都だと思われる<sup>18)</sup>故に、純粋な意味で「北京閥」の名が適用するかも知れない。

「新」を冠した「上海閥」は「4人組」の最初の名称に他ならず、語源は1974年7月17日の在京政治局委員会議に於ける毛沢東の言葉であった。江青を「上海幫」の一員として批判し、君等は「4人小宗派」に成らぬよう注意せよと諭したが、警告された王洪文・張春橋・江青・姚文元が悪名高い「4人組」である。1968年7月27日、毛は「首都労働者毛沢東思想宣伝隊」等を出動させ清華大学を占領し紅衛兵の暴走を止めたが、「文革」の飛び火に助長された日本の第2次反安保闘争は逆に過激派学生の武闘が日増しに熾烈に成った。翌年1月18-20日の東京大学安田講堂攻防で機動隊を阻止する要塞・工学部陳品館の正門には、大きな毛沢東の肖像と「造反有理」と大書した標語看板等が針金で括り付けてあった<sup>19)</sup>が、落城後の極左「革命」運動の弱体化・撲滅の末に「造反有理」も風と共に去ったものの、同じ中国から輸入した「造反」武闘は今でも組織内の反乱や政治家の蛮勇等の形容に使われている<sup>20)</sup>。毛沢東の死去から1/3世紀経った後もその「背後霊」めく亡霊が日本の言説空間を彷徨<sup>さまよ</sup>っており、別の例は彼と共に国交回復の扉を開けた田中角栄の秘蔵っ子・小沢一郎が政争の場で口走った「4人組」である。

小沢が西松建設偽装献金事件で追い込まれて民主党代表を辞任した翌日の2009年5月12日、代表選挙の日程・手順を巡って党役員会で衝突が起きた時、彼は異論を唱えた非小沢系の4人を睨み付けて1人1人を指差して捲し立てた。「福山、長妻、安住、野田、この4人組。お前ら何時も反対反対と。最後くらい言うことを聞け！」記録文学作家・大下英治著『民主党政権』

(ベストセラーズ, 2009)はこの臨場感溢れる逸話を伝え、党内で「まるで“4人組”だな」との聲が駆け巡った波紋に就いてこう解説した。「中国で文化大革命を主導し権勢を誇ったが、毛沢東国家主席の死後は失脚した“4人組”になぞえられたものだ。」<sup>21)</sup> 評論家・立花隆は民主党政権誕生(9月16日)の直後に書いた「小沢一郎 “新聞将軍”の研究」の中で、党幹事長として陰の最高権力者に返り咲いた当人の力の根源に迫るこの場面を取り上げて、攻撃性に満ち満ちた言葉を使って決定的な場面で空気を一瞬にして変えて了うその政治力は、幾度も自民党や派閥の会合で激烈な演説をやることで集団を引き摺った師匠・田中角栄譲りのものだ、と述べた。曰く、俱ともに人並み外れた存在感を持つ2人の口から火を吹くような凄まじい勢いで激しい言葉が飛び出ると、大抵の人は黙おもてり込んで彼等に対して面を冒して物を言う人がいなく成って了うのだ<sup>22)</sup>。

先代「閣将軍」の誕生の契機は他ならぬ立花の追及に因る首相退陣と後の院政支配であったが、一介のフリーライター及び『文芸春秋』取材班の告発報告『田中角栄研究 その金脈と人脈』(同誌1974年10月号)は、綿密な資料と大量の取材に裏打ちされた的確な解剖で検証対象の病巣を抉り出し病理を突き止め、絶大な勢力を誇る最高権力者を忽ち追い落とした戦果は「筆は剣より強い」威力を鮮烈に顕わした。「知の巨人」の名声を欲しい儘にした彼が35年後の同誌11月号で発表した上記の論説は、紙背を徹する眼光に満ちていながら引用文の中の事実誤認を見落とした様である。『民主党政権』の発売日(9月9日)の恰度33年前に逝った毛沢東は、1954年に初代で就任した国家主席を59年に辞めて党中央と中央軍事委員会の主席に専任した。後任の劉少奇が「文革」で失脚し軟禁中に非業の死を遂げた後も彼はこの職位の復活を認めず、毛沢東時代の党・軍優位を物語る様に国家主席は1983年までは空席の儘で、その17年間は建国から「文革」開始までの年数に匹敵する。

憲法が定めた元首の長期的な不在と1975年の新憲法に於ける国家主席の空位の明確化は、「中空」ならぬ「中控」(党中央及びその主席に由る「控制」[制御])の結果である。朝鮮では原則5年に1度開催するはずの労働党大会は1980年以来開かれておらず、最後と成った第6回(10月10-14日)も突き詰めれば金正日の党中央書記・政治委員会常務委員・軍事委員就任の為に設定されたのだ。彼は1974年2月13日の党中央第5期第8回総会で政治委員会委員・秘書(党・政・軍担当)に選出され、翌日に空かさず金日成キム・イルソンの後継者に「推戴」されたが、既に1972年12月22日の党中央第5期第6回総会で「唯一後継者」とする秘密決定が行われていたと言う。満30歳(1972年2月16日)の後の大出世も孔子が言う「三十而立」(30にして立つ)に数えられるが、長らく公表せず次世代領袖予定者が「党中央」の呼称でのみ表現されたのは、如何にも党・国・軍を私物化する家長制らしい異常で且つ理に適う状況である。「父王」の急逝(1994年7月8日)と建国世代の元帥オ・ジンウ・呉振宇人民武力部長(国防相)の病死(翌年2月25日)後、世襲の「太子」が唯一の常務委員として政治局とを主宰する独裁体制は2010年



「毛沢東<sup>コンプレックス</sup>情結」と「北京<sup>コンプレックス</sup>情結」——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）（夏）

9月28日、新「太子」・金正恩<sup>キム・ジョンウン</sup>（3男、26歳）への世界史上稀有の第3代世襲の布石として44年ぶりに党代表者会議が招集されるまで続いた。

金正日は1997年10月8日に、党大会や党中央総会を経ずに全国各地や軍単位で開かれた党代表会で党中央総書記に「推戴」された。翌年9月5日の最高人民会議第10期第1回会議で又、廃止と成る共和国主席の代りの国家の最高職責・共和国国防委員会委員長に選出された。同職の初就任（同第9期第5回、1993年4月9日）の前の1991年12月24日の第19回党中央総会で人民軍最高司令官に「推戴」された人事は、翌日のゴルバチョフ大統領辞任・ソ連解体に象徴される時流に逆行した「先軍政治」の起爆装置と成った。1972年12月27日に最高人民会議第10期第1回会議が採択した朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法では、軍最高司令官・国防委員長俱に新設（金日成就任）の国家主席が兼務すると成っていたが、1992年4月9日の改正に由って軍の統帥権は国家主席から国防委員長に委譲された。軍の統帥権を掌握した後に党首の座に上<sup>のぼ</sup>ったのは毛沢東と同じ「先軍」の経路に見えるが、国家主席を空席にした儘で我が儘の治国を行うのも大同小異である。朝鮮中央放送等で使われる100以上もの金正日賛美の呼称の中の「百戦百勝の鋼鉄の霊将」は、「文革」中に毛とその思想に捧げられた「偉大な統帥」と「戦無不勝」<sup>23)</sup>を彷彿とさせるが、「党中央＝金正日」と「毛主席＝党中央・軍委主席」の等式は「朕即国家」（朕は国家なり）の本質を共有する。

毛沢東が領袖の地位を固めた利器は銃（軍事力）と筆（言説力）で、鋭利で奥<sup>レトリック</sup>深い修辞で人心を掴め集団を従わせるのは彼の必殺技である。田中角栄や小沢一郎以上の凄い剣幕で瞬時に流れを変えた数々の難関の乗り越え方は、「偉大な導師（教官）」「偉大な舵取り」の賛辞に相応しい。日本人が最も怖れる「地震・雷・火事・親父」の相関・相乗を思わせる名場面として、「文革」前夜の1964年末の会議で自分に対して対等的に異論を挟んだ劉少奇に激怒し、「君は何様だと思っているのだ。儂が小指1本動かせば、君を打倒できるのだぞ！」と恫喝した<sup>24)</sup>。唯我独尊の君臨を維持する為の「無頼」調の宣戦布告は上層部で激震を走らせ、「党国」全体を巻き込む「革命無罪・造反有理」の動乱の発火点に成った。中国語の「発火」は日本語と同じ「火を發する」「（火薬を）發射する」の他に、「發怒」「發脾氣」「生氣」と同様の「怒る」意も有る。怒気を爆発させた毛の「雷」は「神成り」<sup>かみな</sup>（日本語の「雷・神鳴」の音・意に因んで神格形成を言う造語）の仕掛けの効用を持ったが、その治下の「宮中」政争に自身の内紛劇を擬えた民主党関係者の眩きは毛の遠雷<sup>こだま</sup>の本霊と重なる。

初代内閣安全保障室長（1986-89）・佐々淳行は曾て警視庁警備部・警備第1課長として、「東大落城 安田講堂攻防72時間」の陣頭指揮に当たったが、同題の回想録（文芸春秋、1993）の中で学園紛争の起因と治安当局の内幕を振り返って、日本大学の商業主義・放漫経営や東京大学の権威主義・陳腐空疎に対して、学生側が怒って騒ぐのも無理が無く「造反有理」だった一面も有り、警視庁は当初秘かに学園民主化運動に理解を示していた、と語った<sup>25)</sup>。中国でも「文

革」初頭の造反は官僚主義等への鬱憤が溜まっていた大衆の共鳴を得た節が有るので、日本に於けるこの4字新語の受容への理解に役立つ。佐々は3年後の2月19-28日の「連合赤軍“あさま山荘”事件」の際にも、警察庁が現地に派遣した指揮幕僚団の事実上の責任者を務めたが、同題の回想録（文芸春秋、1996）の最後で「背後霊」に触れた処は歴史の深層・暗部の「霊域」を鋭く衝いている（本稿筆者の造語である「霊域」は、神仏等を祀った神聖な地域を言う「霊域」に因みつつ、字面の通り「死霊・怨霊」が彷徨う「聖域・禁域」を指し、「霊異記」や中国語でも「霊域」と同音の「領域」[lingyu]にも引っ掛けたものである）。

連合赤軍の集団私刑で14名の「総括」対象が同志に殺され埋められたことが、籠城突破・人質救出作戦の終了後に白日の下に曝され国民の白眼視を招き、過激派は完全に世論の支持を失い急速に衰退して行ったが、日本社会運動史上画期的な歴史の曲り角の大事件として位置付けた佐々は、句読点を入れぬ89文字<sup>26)</sup>もの長文も含めて、息詰まった口調でこう述懐する。「“あさま山荘”を包圍している間、私たちが感じ続けていた、あの得体の知れない不気味さは後から思えばこの血塗れの集団リンチ殺人事件の犠牲者たちの死霊が犯人たちの“背後霊”となって魔界から怨みをこめて一部始終をジッと凝視していたせいかも知れない。/そう思うと思わずゾッと背筋が寒くなる。十日間彼らが呼びかけても応ぜず、アジ演説もせず、要求も出さず薄気味悪く沈黙していたのも、死霊にとり憑かれていたためだったのだろうか。」<sup>27)</sup>

『東大落城』は「蛮族来タリテ羅馬滅ビタルヤ、非ズ、羅馬自ラ滅ビタリ」という、英国の歴史家・ギボシ著『羅馬帝国衰亡史』（初版全6巻、1776-88）の名言を引いた<sup>28)</sup>が、「破山中賊易、破心中賊難」（山中の賊を破るのは易く、心中の賊を破るのは難し）という王陽明の逆説と結び付ければ、潜伏先の冬の長野の山中で民間人の命を盾に銃撃戦を繰り返した「賊」（罪人）<sup>29)</sup>は、窮極の処は自らの心中に潜んだ冷酷非道な「賊」（邪悪）に腐蝕されて自滅へと狂奔したわけだ。神出鬼没に跳梁跋扈した「共産主義闘士」別働隊は「幽霊退治」の「神聖同盟」の権力に潰される前に、内訌で粛清された戦友の遺恨が化した不可視の呪縛で集団自爆を誘発されたのである。「文革」後の中国では共産党・社会主義・マルクス-レーニン主義への信任は著しく低下したが、その「信仰危機」の根源も政争・武闘の破壊と林彪粛清の衝撃に由る毛沢東神話の破綻・崩壊に遡れる。

体制の正統性・正当性を内外に印象付けるように毛の肖像は今も天安門城楼の真ん中に掛かっており、世界の都市の広場の中で最大の面積を誇る此処に遺体を永久に保存する毛主席記念堂が建てられたが、広場及び周辺の市街で冷戦終結・東欧社会主義陣営消滅の年に学生・市民への武力弾圧が強行されたのは、垂死の毛が最終的に決断した民兵に由る大衆鎮圧の「4.5惨劇」の祟りも感じられる<sup>30)</sup>。「清明時節雨紛紛、路上行人欲断魂」（清明の時節 雨紛紛、路上の行人 魂を断たんと欲す）という杜牧の「七絶・清明」の通り、墓参りをし祖先の冥福を祈る清明節（4月5日）は魂の断ち切れるほど痛ましい心境に成り易い時節だが、「霊域」に因

んで「靈異記」（平安初期の仏教説話集『日本国現報善悪靈異記』）の因果報応が連想される。

最晩年の毛沢東は衰弱・悲観の故に世界中の「落魄<sup>らくはく</sup>の王」に尋常ならぬ親近感を抱き、特に1974年に8月9日に米国史上初で大統領在任中に辞任したニクソンに就いて、民主党全国委員会<sup>オフィス</sup>事務所への侵入・盗聴に関与した為の失脚に怪訝と同情を表明し、1976年2月に落魄<sup>らくはく</sup>れた彼を中国に招待して私的な会見で別れを告げた。毛が林彪事件（1971年9月13日）後10月8日に初めて会った外賓のエチオピアのハイレ・セラシエ皇帝も、1974年に不正が発覚し9月2日に軍事政変で逮捕され、44年間に亘る在位が廃止された上で命まで落とした（拘禁中の翌年8月27日に病死したという公式発表に対して、秘密処刑や廃位直後の射殺等の説も有る）が、毛は彼我の個人的な絆や両国の公的な関係の薄さにも関わらずその最期を惜しんだ、とも言う<sup>31)</sup>。自分より1歳年上（廃位時82歳）の相手への感情移入も自己愛の屈折した表出と思われるが、同じく超人的な資質<sup>カリスマせい</sup>が地に墮ちた偶像の田中首相の下野に対する毛の反応は不明である。受託収賄罪等の容疑に由る角栄逮捕の翌日（1976年7月28日）に唐山大地震が起き、寝たきりの儘で43日後に他界した毛の最後の読書は三木武夫の伝記だった。死を1日余り後に控えて発声も不明瞭の状況下で要望を伝えようとして、彼は苦勞して3本の横線を書き病床の木枠に3回弱々しく触れた<sup>32)</sup>が、巡り巡って清廉<sup>イメージ</sup>の形象を以て田中の後任を務めた三木は党内の反対勢力から下ろされようとしていた。

ニクソン、ハイレ・セラシエと田中角栄が次々と権力の座から転落した1974年は、共和国成立25周年の節目に相応しく「批林批孔」（林彪批判・孔子批判<sup>キャンペーン</sup>）運動で始まった。実務志向の周恩来・鄧小平に仕掛けた「4人組」の攻撃は半年近く続き、国民経済の発展と権力構造の均衡に重大な支障を来たした処、毛沢東は7月17日に在京の政治局委員を集めて反乱の「洪水」の氾濫を止めようとした。「洪水」は本稿の比喩として王洪文と江青の氏名の文字や部首に引っ掛けたものであるが、席上2人と張春橋・姚文元が次々と総理を非難した怪気炎は正に中国人が最も怖がる「洪水・猛獣」の勢いだ。半年ぶりに招集した会議で毛は夫人に対して誰もが予期せぬ名指し批判を加え、「彼女は“上海幫（閩）”の一員だ」と言って張・王・姚に向って、「お前たち注意なさい。4人の“小宗派”（小派閥）を作っては成らない」と警鐘を鳴らした<sup>33)</sup>。彼はその年に難病の筋萎縮性側索硬化症で呂律が余り回らなく成り手足に運動障害が起き、老年性白内障で殆ど両目失明の状態に成ったが、2言3言の1発で歴史の齒車を止め且つ逆回転させて了う迫力に君主の貫禄が顕れた。

泣く子を即座に大人しくさせる様な「親父」の「雷」の効き目は申し子の「4人組」に限らず、戦場の鉄人なる将帥や政治の達人なる総理もその一喝で震え上がらざるを得なかった。「文革」当初の1966年7月8日に毛は政治的な遺書の心算<sup>つもり</sup>で夫人宛での私信を書き、中で自らの性格を「虎の気質」（勇猛・非情）と「猴の気質」（躍動<sup>あまのじやく</sup>・反逆）の複合と分析した。副次的な「猴気」を凌ぐ主なる「虎気」は恰度18年後に逝った金日成の国では「山神」と尊ばれているが、「神

隠し」と言い慣わした村共同体の伝承の背後に拉致や誘拐、時に殺害の気配までが立ち上って来る、という山折哲雄の見方<sup>34)</sup>を「金家王朝」(「蔣〔介石〕家王朝」を振った称呼)に由る日本人拉致事件と結び付ければ、急に行方不明に成る「人間蒸発」を天狗や山の神の仕業とした日本古来の発想との繋がりに驚く。

『春秋左氏伝・襄公 24 年』が初出の「立德・立功・立言」(仁徳・功績・言説を立てる)の「3 不朽」も、「虎死留皮, 人死留名」(虎は死して皮を留め, 人は死して名を留む)と言う通り「虎気」が原動力に成り得る。「3 立」論が発せられた紀元前 549 年から中共建国までの 2498 年は奇しくも 1 万年の 1/4 に当たるが、初訪中のニクソンが歓迎宴会での挨拶や本人との会見で敬意を込めて引いた毛沢東の詞は、「一万年太久, 只争朝夕」(一万年は太に久しければ, 只朝夕を争わん)<sup>35)</sup>と言う。元の言い方の「豹死留皮, 人死留名」の原典『新五代史・王彦章伝』の著者・欧陽修の死後 900 年、国交正常化の為にニクソンと田中角栄が訪中したことで毛沢東は功名を遺した。浅間山荘奪還の時機は米・中接近の成功から国民の視線を逸らさせる狙いも有ったと疑われた<sup>36)</sup>が、「上海共同声明」の発表・ニクソンの帰国と重なったその日は世界と日本の歴史上、紛れも無く虎・豹の皮の如く鮮烈な「亮点」(注目を集める焦点)として刻まれている。

中国の豪語には「虎死雄風猶在」(虎は死して威風は健在だ)も有るが、片足が棺桶に入った毛の上記の鶴の一声(中国流で「一声令下」「一言堂」)は、「人之将死, 其言也善」(人の将に死なんとするや, 其の言うこと善し)という曾子の言(『論語・泰伯』)を振って、「虎将死, 其雄風愈烈」(虎の将に死なんとするや, 其の威風は益々凄し)と言えよう。内心の「蛮賊」に由る自滅を喝破した『羅馬帝国衰亡史』第 1 巻初版刊行の 200 年後に、失政を重ねた毛の死去で世界最多の人口を擁する赤い「帝国」は経済破綻・国際孤立の窮地に立たされた。「中華振興」の「中興の祖」・鄧小平の改革・開放路線で強国に返り咲いた頃、毛の徽章を運転の守護神にする迷信の全国的な流行は振り子原理の妙を現わしたが、負の過去が引き摺る浮遊霊と前向きに援助する守護霊を兼ねる背後霊の様な存在は、功罪の評価や世間の愛憎を超えて毛の心霊・言霊の「遺力」の強烈・恒久を思わせる(「遺力」は「遺産」「遺恨」と「余力」「底力」等を合成し、「威力」との同音に因んだ造語)。小沢一郎が取り憑かれた田中角栄の亡霊は古い政治の呪縛として未だに幽かに出没を見せたりしているが、「4 人組」を叱咤する「落雷」が 1 年前の四川大地震並みに瞬時人々を無力化にしてしまったのは、「A 級戦犯」の比喩と同様に呼称自体が血腥い魔力が込められている所以でもある。

「4 人組」の英訳は通常の a group (team) of four people, a quartet (te) と a foursome の他、「文革」所産の固有名詞として the Gang of Four も有る<sup>37)</sup>が、この新概念の名付け親も毛である。彼は 1975 年 5 月 3 日に最後に政治局(在京委員)会議に臨席した際、主宰者として「4 人幫」を組むのは止めろと改めて嚴重に釘を刺した。1966 年末の上層部会議で賀龍元帥

を打倒すべきだと唐突に言い出した江青は毛の制止を無視して、不遜にも「主席、大衆の決起を許さないなら、私は貴方に造反しますよ！」と発作的に<sup>ヒステリー</sup>吠えたが、「上海幫」の結託を叱られた前年の場合も「公開遺言」じみた訓示を垂らされた今回は<sup>さすが</sup>流石に黙り込んで、1度も毛に謝らなかつた林彪並みの自尊心を<sup>なぐ</sup>撲り捨てて空前絶後の反省文提出で恭順の意を示した。「上海幫」の言い方を変えたのは、2つの語弊を考えれば明察と言えよう。第1、勤務地で分類すると上海の幹部は皆同類にされて了い、「北京幫」「山東幫」「広東幫」等の紛らわしい概念も派生しかねない。第2、この4人は上海に於ける仕事・生活の経歴が有るものの、純粋な上海人は1人もいなく姚以外の者は上海語を1言も話せない<sup>38)</sup>。

上海で生まれ育った姚は浙江が原籍で、半分の上海人としか言えない。江蘇省淮安出身の周恩来の気質を見ても、「師爺」（明・清の地方長官の幕僚〔顧問・補佐〕輩出の原籍・浙江省紹興の遺伝子が多い。物事の根本を忘れることや自国の歴史を知らないことの譬えとして、「数典忘祖」（典籍を数え並べる時に祖先が「司典」であることを忘れる）という成語が有るが、それを忌む意識から中国人は父系の「祖籍」（原籍）を強調しがちで、周は一再ならず紹興人であると自称した。自ら帰属により多く言及した淮安との争いを避ける為に「江浙人」の折衷も使った<sup>39)</sup>が、魯迅逝去2周忌の記念集会（1938年10月19日）で彼は、血統上は同じ紹興出身の魯迅先生の「本家」（父方の祖先を同じくする同族）かも知れないと語ったし、彼自身の遺体告別式・追悼大会に参列した両地所在の省の責任者の氏名の公式発表順も浙江、江蘇である。

長春出身の王洪文に対して張春橋と江青は山東省の巨野と諸城の人で、山東籍の比率は「中央文化革命小組（グループ）」では一層高い。この「文革」指導本部は1967年2月から中央政治局・書記処に取って代り、党・国を牛耳る第2の権力中枢と化した。旗艦気取りのこの機関の奇観として、最盛期の8人中の顧問・康生、筆頭副組長・江青、副組長・張春橋、組員（構成員）・閔鋒と戚本禹の故郷が山東（組長・陳伯達は福建、姚文元と同じ組員の王力は周恩来の淮安同郷）である。同工異曲の共和国の伝説は湖北省紅安（旧称・黄安）の「將軍県」で、開国將軍の中で全国最多の61名を占め、且つ2人の国家主席（董必武〔代行〕・李先念）を出した。「造反総司令部」に山東人が異常に多かったのも、反逆の物語・『水滸伝』の舞台を思えば頷ける。

紅安に次ぐ「將軍県」の安徽省金寨（55人）、江西省興国（54人）、湖南省平江（52人）、江西省吉安（46人）、同省永新（41人）、湖北省大悟（37人）、河南省新県（35人）、安徽省六安（34人）、湖南省瀏陽（30人）<sup>40)</sup>は、地続きの5省の内に密集した点在を呈する。<sup>いず</sup>何れの地も「窮則思変」（窮〔乏〕すれば変化を求める）の氣風が強かつたが、「人往高处走」（人は高きに赴く）の原理は、1930年代半ばに上海で新劇・映画の俳優として頭角を現わした江青や、同じ頃に上海で校正係から文筆家に転身した張春橋にも貫かれた。姚文元が市党委宣伝部副部長・張春橋

の紹介で文芸誌の編集者に成り、評論家・理論家への道を歩み始めた1956年に、兵役を終えた王洪文が上海綿紡績第17工場に入り、労働者から保安課勤務に昇進し臨時工の保母・崔根娣（原籍・淮安、上海出生）と結婚した。1967年8月、翌年1月に「中央文革」の王力・関鋒、戚本禹が相繼いで犠牲山羊<sup>スケープゴート</sup>として失脚後、姚は唯一の組員として宣伝・報道機関を司り、王洪文は1973年の第10回党大会で毛の後継者の一歩手前まで行ったが、2人とも上海で異例の大出世の端緒を掴んだ必然性が有る。

党中央弁公庁（事務局）の秘書、信訪（投書・陳情処理）課長を歴任し、毛の信任と江の寵愛を得て「文革」の急先鋒と成った戚本禹も、1931年に山東・威海で生まれ1942年に父親の勤め先・上海に行き、建国の年から移った北京には1986年の出獄後は政治的な理由で住めなく成った故、希望通り再び妻子が居る上海に定住し市図書館に勤務した。太平天国の将領・「忠王」李秀成を裏切り者と断罪する歴史研究論文（1963）が理論家として出世した起点だが、軍内の造反・奪権を煽動した極左的な武闘・破壊志向は「魯風」（「魯」は孔子の故国〔今の山東〕の名、又「粗魯」〔粗野〕「魯莽」〔軽率。向う見ず〕の略）で、目覚ましい文才は中央共青团学校へ入る前に上海の中学・高校で基礎が出来たものである。彼は首都のその幹部養成学校に1年ほど在籍した後に選抜で中央弁公庁に派遣されたが、建国後、再び政治の中心と成った北京は文化の中心への復活を目指して、最大の文化基地・移民都市の上海から教育・出版・文芸関係の機関・人材を行政の力で大量に吸い上げた<sup>41)</sup>。

得意の絶頂から失意の地獄へ転落した致命傷は建国前の江青の醜聞<sup>スキャンダル</sup>に絡む資料の処理を誤った事だが、迂闊に触って酷く崇った元首夫人<sup>ファースト・レディー</sup>の古傷と関連の書簡・報道・写真の出所も往年の「魔都」・上海が多い<sup>42)</sup>。2ヵ月後の3月22日の北京衛戍区司令・傅崇碧の突如逮捕にも「魔界」の背後霊が散ら付くが、許広平が前年1月に戚が公務で文化部から持ち出した亡夫・魯迅の原稿等の行方不明に焦慮した余り、手紙で周恩来に調査・善処を要請した翌日の3月3日に心臓発作で急逝し（享年70歳）、傅は中央文革弁事組（事務局）の保密室に在ると突き止め8日に部下を連れて江青に報告しに行くと、罣に掛かって「武装闖入」「首長殴打」等の無実の罪名を着せられた次第で、禍根と成った文豪・魯迅の居住・発信の地も晩年には文化人の精鋭が集結した磁場の上海である。

「文革」発動に関する1966年5月16日の党中央通達は、10年余り続く大災厄の幕開けと成ったが、「継続革命」の名で展開した「死の行進」めく権力闘争の最初の「消音<sup>くちび</sup>口火」は1965年11月10日、上海の『文匯報』に姚文元の論文「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」が発表された事である。歴史学者・呉晗の脚本に由るこの京劇が思想・人事粛清の突破口に選ばれたのは、「大躍進」に異論を唱え1959年に失脚した元国防部長（国防相）・彭徳懷元帥への同情が読み取られ、呉が副市長を務める北京の指導部は毛沢東から「独立王国」と嫌われた所以である。毛の戦略に沿って自分の秘書に過ぎぬ「閑人」の江青<sup>43)</sup>が秘密作戦を指揮し、上海市党委宣

「毛沢東<sup>コンプレックス</sup>情結」と「北京<sup>コンプレックス</sup>情結」——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）（夏）

伝部長・張春橋と連携して姚文元に狼煙<sup>のろし</sup>を点けさせた。陰謀の産物は進行・意図俱に劉少奇・周恩来等に察知されなかったが、北京市党委機関紙『北京日報』は毛の干渉で不転載の方針を変えさせられたが、国家主席打倒の先鞭として市委書記・市長・中央政治局員・書記処書記の彭真が間も無く更迭された。

毛沢東時代に失脚率が突出した要職は国防部長、軍総参謀長の他に、首都の党・政府責任者と『人民日報』社長も有る。陳希同事件や重症急性呼吸器症候群禍<sup>SAR</sup>に因る北京市党委書記・孟学農の解任（2003）と共に、「文革」初頭の首都党委の全面改組は「天子のお膝元」の地政学的な危険<sup>リスク</sup>を示した。党中央機関紙の責任者に格別の重圧が掛けられるのは、剣（軍・警察・公安）に勝つとも劣らぬ筆（宣伝・報道機関）の威力の為である。毛は初の『毛沢東選集』（1944）の編集責任者・鄧拓に建国後の『人民日報』を委ねたが、自分の講話の広報に対する鈍感への苛立ちから1957年6月7日に交代を命じた。毛が自ら添削した翌日の同紙社説「これはどういう事か」は「反右派闘争」の進軍喇叭と成ったが、後任社長・呉冷西も毛への追従の不十分で「文革」で二の舞いに成った。北京市党委宣伝部長に左遷した鄧は「5.16通知」の2日後に迫害に抗議し自殺したが、首都の「心臓」+宣伝の「喉・舌」の二重の重要性も死に追い込んだ要因に思える。

「易帥」（総帥交代）直後の6月14日の『人民日報』に、編集部の名義に由る毛の評論「文匯報の一時期の資産階級的な方向」が、10日の『文匯報』初出の姚文元の「備考録——新聞読後随想」の転載と共に発表された。姚の雑文は毛の5月25日の談話に対する『解放日報』（上海市党委機関紙）の大々的な最上段<sup>トップ</sup>の首位扱いと見比べて、『文匯報』の下方<sup>ベ</sup>に載る1段<sup>ただ</sup>だけの記事並みの小さい扱いを槍玉に上げたが、毛はこの「棍棒」を拾って党外の『文匯報』『光明日報』の共産党軽視の傾向を糾弾した。2月10日付けの『文匯報』に載った姚の「教条と原則——姚雪垠先生と討議する」も、主要な新聞・雑誌を大量・丹念に読む毛の目に止まり同17日の談話で褒められた<sup>44</sup>。『文匯報』第3面の副刊（文芸・学芸欄）「筆会」（文芸社交集会）の右下隅の25歳の無名な文学青年の雑感を発見・利用したのは、読書家・政治家の鋭敏な嗅覚と強<sup>した</sup>かな計算が面目躍如たる処であったが、姚の投機的な狡知の賢さと上海の民間新聞、乃至上海の発信力の強さも窺い知れた。

『人民日報』1958年元旦社説の題「乗風破浪」（追い風に乗り浪を蹴って進もう。果敢に前進せよ）は、直前の12月25日の上海市第1期第2回党大会での第1書記・柯慶施の報告から取ったのだ。数時間も読み上げた大演説（題の後半は「加速建設社会主義的新上海！」[社会主義の新しい上海の建設を加速せよ]と続く）は、張春橋が柯から聞いた毛の思想的な動向に基づいて起草し、毛の認可及び修正を得た物である<sup>45</sup>。1954年から65年の急死まで市党委の責任者であり続けた柯（安徽省歙県の人）は、「文革」前の「左王」（左派の精神的な首領）で「4人組」の「上海閥」の元祖とも言えるが、党中央機関紙の逆「本歌取り」は毛の激賞に由来した。

1958年1月に南寧で開かれた中央指導者と一部の地方責任者の合同会議で、毛は泡沫的な経済建設の「冒進」(猪突猛進)に抵抗した周恩来を叱咤し、「恩来、貴方は総理だが、この文章は書けるかね」と挑発的な質問を投げた。周は「書けません」と屈辱的な答えを余儀なくされ、総理を柯に乗り換えようとする毛の魂胆を悟った。

不本意な進退伺いを出した周は6月9日の政治局常務委員会で慰留されたものの、国政に関する決定権を失い重大な事柄は中央書記処に指示を仰ぐ従属的な立場に置かれた<sup>46)</sup>。柯は11月から市長を兼務するのに止まり毛の目論みは不発に終わったが、死去直前の年頭に第3期全国人民代表大会第1回会議で序列第5位の副総理にも成った。恰度10年後の1975年1月の第4期全人代第1回会議で、愛弟子の張春橋が鄧小平に次ぐ第2副総理の座を射止めた。毛は張を自分の思想の最大の理解者として寵愛し、第9回党大会(1969)の後わざわざ連れて蘇州に赴き、毛の後継者であることが明記されたばかりの林彪に張への禪譲の意思の有無を打診した<sup>47)</sup>。翌年の9期2中総会(江西省廬山)でも張春橋を守るべく非情に陳伯達を斬り林彪一味と袂を分かったが、南寧会議で柯の報告を讀えた毛の言葉には別格扱いの秘密の一端が見え隠れする。「上海は工業総生産が全国の5分の1を占め、100万人の無産階級<sup>プロレタリア</sup>がいて、資産階級の集中する処でもある。資本主義は先ず上海で生まれ、歴史は最も長く、階級闘争は最も先鋭化している。こんな処だからこそ、こんな文章が生まれたのだ。こんな文章は、北京では無いが、多くないのだ。」<sup>48)</sup>

姚文元が「資産階級司令部」へ「爆弾」を投げた1周年の1966年11月10日、「上海工人革命造反総司令部」の2千人の闘士が「司令」・王洪文の引率で、当該組織の合法性を承認しない市党委に抗議すべく北京への陳情に発った。列車は上海当局の指示で郊外の安亭駅に止められた為、一行は軌条<sup>レール</sup>に座り込み上海—南京間の運行を20時間中断させた。中央文革小組副組長・上海市党委書記の張春橋が談判に臨みその要求を受け入れ、毛の支持を取り付けて市党委第1書記を屈服させた。後に毛が後継者に育てようとし(やがて挫折)した王はこの「奇功」に続いて、翌年の8月4日に20万人の労働者を指揮して上海重油機関發動機工場の敵対組織を鎮圧した。折しも上海滞在中の毛に与えた強烈な印象は、1968年7月27日の首都労働者毛沢東思想宣伝隊の大軍に由る清華大学紅衛兵への落城攻撃や、同じく毛が命じた1976年の群衆運動への首都民兵の武力「清場」(広場清掃)にも投影された。巡り巡って「4.5惨劇」の指揮官の1人が党副主席・王洪文であったが、上海発の下剋上は又も領袖の容認で中央への進出を果し正統に化した。

「8.4武闘」の際に毛が同市に居合わせたのは、武漢「7.20事変」に遭遇した後の緊急避難の延長である。彼は武漢の造反派・軍人が滞在先の賓館の敷地内で王力を殴打・拉致した暴挙に驚愕し、安全上の考慮で9年も使わなかった飛行機<sup>49)</sup>で脱出した。北京に戻らず武漢と同じ灼熱地獄の上海に直行したのは、安全圏と見做し「文革」の新しい仕掛けを思案する為であっ



「毛沢東<sup>コンプレックス</sup>情結」と「北京<sup>コンプレックス</sup>情結」——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）（夏）

たろう。8月4日に彼は江青への手紙で各地の左派の大量な武装化と群衆に由る専制を提唱し<sup>50)</sup>、前年12月26日の73歳誕生日の祝宴で祈願した「全国の全面内戦（全面的な階級闘争）」<sup>51)</sup>の火に油を注いだ。南寧会議で彼の上記講話の要点筆記に真っ先に「1上海報告」と有った<sup>52)</sup>が、「天下大乱」を起して後に「天下大治」へ導く彼の「文革」構想<sup>53)</sup>の具体化は、上海の実験や経験・教訓を基にした部分が少なくない。毛沢東時代の「歴史（history）＝彼の物語（his story）」を体現する様に、国慶節の天安門広場で催された盛大な群衆祝賀行進の先頭に立つ労働者集団には、「毛沢東号」機関車（1946年に命名）の機関士長が点睛の「顔」を成した事も有るが、文武両輪を駆動した張春橋・姚文元と王洪文は「偉大な舵取り」を補佐する「大副・二副・三副」（1等・2等・3等航海士）に近い。

毛が38歳の王を後継者の位置に就けたのは、農家出身と軍人・労働者の経歴が大きい。革命の主力とされる「労・農・兵」が一身に集まる符号的な意義は、無産階級が最も多い上海の産業労働者の基盤で増幅した。血縁関係を重んじる毛は最晩年に政治局との連絡を甥・遠新（遼寧省党委書記）に任せたが、准後継者並みの彼は毛夫妻の意向に沿って王洪文の紹介で上海綿紡績17工場の女工を娶った<sup>54)</sup>。張春橋の3女も王の妻が紹介した古巣の同工場の労働者に嫁いだ<sup>55)</sup>が、産業労働者・上海を特別視した毛・張の「情結」（潜在的な強い複合感情 [例えば敬・畏、愛・憎混交]。コンプレックス）は、中共の<sup>イデオロギー</sup>観念形態やその政権の価値体系と一致する。王が上海最大の労働者造反組織の首領に推されたのは、「総司令部」の中の僅少な党員の1人である事が決め手と成った<sup>56)</sup>が、巨大な新「梁山泊」の頂点で彼が獲得・活用した金箔と資本には、「産業大軍」に対する社会の畏敬と上海の「硬實力」（hard power）に対する中央の顧慮が有った。安亭駅での恐喝の奏功は王・張の上海市党委転覆の思惑との合致だけでなく、経済の動脈を押さえた急所一撃の威力にも因る。

## 抗争・発展の中の南北二都物語と相剋相生の「南人北相，北人南相」の理想

首都建国記念祝賀行進<sup>パレード</sup>に於ける鉄道労働者の先導の寓意も、1923年2月の北京—武漢鉄道の<sup>ストライキ</sup>同盟罷工の殊勲に由来した。鄭州で1日に開かれた京漢鉄道労働組合成立大会が軍閥・呉佩孚に禁じられた末、7日に武漢・北京等で武力鎮圧に由る流血の惨禍が起きた。「2.7大罷工」は共産党が指導した労働者運動の先駆として知られ、2年前の中共創設大会の代表の1/4に当たる3人（張国焘・陳潭秋・包惠僧）が関与した。示唆に富む逆説的な事象として、中華文化の発祥地の中原の河南の省都・鄭州は発火源であったが、同市はこの歴史的な事件でも経済力・文化力の劣勢に似合って影がやや薄い。対照的に、軍・警察が大々的に虐殺を遣った武漢と北京は地政学的な重みが際立った。興味深い歴史の連環として、武漢は辛亥革命が勃発した地であり、それを省都とする湖北から中共第1回党大会の代表の4割弱の5人（上記の陳・包と董必

武・李漢俊・劉仁靜)が出た。一方の北京は1919年「5.4運動」の主戦場であり、中共建党的前後に主な創設者・陳独秀と李大釗が活動・生活していた都市である。

中共の建国は「鉄砲から政権が生まれる」という毛沢東の命題の通りであったが、「書誌から革命が生まれる」とも言えなくない。何しろ建党初期の思想的な領袖・陳独秀と李大釗は北京大学教授であり、毛は李が館長であるこの最高学府の図書館で助理員を務めた時期が有る。同時に重要な事は、初回党大会は上海で開催されたのである(途中で浙江省嘉興に移動)。その代表の人数は党史専門家等の長年の探求を経て、都市や滞在国の順に依る次の表記が定説と成った<sup>57)</sup>が、上海が2番目の北京の前に在るのは意味深長である。更に括弧の中に本稿筆者が付記した出身地を見ると、南北のこの2大都会とも地元の者を出さなかった。「上海 李達(湖南人)・李漢俊(湖北人)/北京 張国焘(江西人)・劉仁靜(湖北人)/長沙 毛沢東・何叔衡(俱に湖南人)/武漢 董必武・陳潭秋(俱に湖北人)/済南 王尽美(山東人)・鄧恩銘(貴州人)/広州 陳公博(広東人)・包惠僧(湖北人)/日本 周仏海(湖南人)」の中に、湖北5、湖南4、江西・広東・山東・貴州各1という構成は、「両湖」の人の気質の激越と革命家の輩出との相関を示唆する。

毛沢東が言った上海の「歴史は最も長い」とは無産階級<sup>プロレタリア</sup>と資産階級<sup>ブルジョア</sup>の闘争を指すと解すべき<sup>かい</sup>で、その「最も先鋭化」も紛れもない事実である。1919年の巴里講和会議で国益を損なう妥協に傾いた北洋政府に抗議して、5月4日に3千人の学生が天安門前で示威集会・行進を行い、鎮圧に遭って直ぐ北京全市の学生が同盟休校<sup>ストライキ</sup>を敢行した。6月3、4日に当局が千人近くの学生を逮捕した事態の拡大で、上海を初め多くの主要都市で操業・営業停止の抗議行動が連鎖的に起きた。北京の学生が中心を成す「5.4運動」は上海の労働者・商人・知識人等が主体と成る「6.5運動」に発展した。10日に政府は学生の釈放、軟弱外交の責任者の解任を発表し、28日に講和条約の調印を拒否するなど譲歩したが、新しい台風の目の上海は現代史の序幕で主役として躍り出たわけである。中共の母体と前身は創設大会に参加した各地の共産主義小組であるが、先駆者は1920年6月に上海で成立し「中国共産党宣言」を起草した上海共産主義小組に他ならない。書記・陳独秀と李漢俊・李達の他に『共産党宣言』の訳者・陳望道も入ったが、後に上海復旦大学教授に成った彼と同じ浙江省出身の創設成員・俞秀松は、姚文元の原籍と同じ諸暨の人である。

王尽美と江青の諸城同郷の奇縁は「4人組」の妙な由緒を思わせるが、第1回党大会代表の中で王は唯一人の北方出身者である。出席の6都市の共産主義小組の中で山東の省会・済南は北京と共に北方に在るが、南方の上海・長沙・武漢・広州はその倍の数と成る。「文革閥」の内の山東籍の多さ<sup>58)</sup>は益々異様に映るが、中国の4大料理の中で唯一北方籍の山東料理が清の宮廷で主流を成した事も面白い。1421年の北京建都の恰度500年後に巡り巡って、北京政府へ対抗する広州革命政府が成立し、安徽籍の北京大学教授を頭とする共産党が上海で創設され

「毛沢東<sup>コンプレックス</sup>情結」と「北京<sup>コンプレックス</sup>情結」——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）（夏

た。蒙古<sup>モンゴル</sup>で専用機が墜落し変死を遂げた林彪と妻子は毛との政争に敗れた後、第2の中央を樹立する為に広州へ亡命する計画も有ったとされるが、国民革命軍が北伐を始めた広州も、革命派新軍が辛亥革命を起した武漢も、戦略的な要地でありながら政治的な中心に成り得なかった。鴉片戦争の矛先が広州から北上し天津・北京を目指したのも、毛沢東・鄧小平の最後の闘争と成る北京からの「南巡」（1971、92）は、揃って先ず武漢で最初の訓示を行い最後は上海で締め括った。武漢蜂起→民国成立→北京支配→上海政変→南京建都も、似た地政学的な重心の自然な移転と思われて来る。

1894年に孫文（広東人）が<sup>ハワイ</sup>布哇で最初の資産階級革命団体・興中会を創り、翌年に香港輔仁文社と合併し同社の楊衢雲（福建人）を会長兼合衆政府大統領に選出したが、10月10日の広州蜂起は頓挫した。1903年に黄興（湖南人）が長沙で華興会を立ち上げ、翌年に蔡元培（浙江人）が上海で光復会を結成し、興中会と共に05年に東京で成立した中華同盟会に加盟した。辛亥革命は南方の政治家・革命団体及びその影響下の軍隊が発動し、東北の満族を中核とし北京に枢軸を置く王朝を打倒したのである。「北極熊」に対抗する力の無い孫は臨時大統領を辞任したが、北京（北洋軍閥）政府の歴代首脳（大統領や大統領代理、臨時執政、海陸軍大元帥）の出身地を見ても、袁世凱（河南）、黎元洪（吉林）、馮国璋（河北）、徐世昌（〔当時・河北〕天津）、曹錕（同）、段祺瑞（安徽）、張作霖（遼寧）と、段を除いて大清帝国の皇帝と同じく北方人一色であり、呉佩孚の山東籍も「軍閥首領＝北方人」の相場を印象付けた。対して、北伐の勝利を収めた国民党政権の「4大家族」は3位の孔祥熙だけが北方（山西）で、蒋介石と陳果夫・立夫兄弟は浙江で、宋子文・宋藹齡（孔夫人）・宋美齡（蔣夫人）兄妹は上海で生まれ育った（原籍は海南）。

上海「4.12政変」後の中共第5、6回党大会（1927年4月27日－5月9日、翌年6月18日－7月11日）は、蒋介石の魔手が届かぬ武漢、モスクワで開催されたが、党中央は1933年初頭まで敢えて摘発の危険を冒して上海に留まった。政治局候補委員・顧順章と総書記・向忠発、政治局常務委員・盧福坦（山東）の裏切りに因る壊滅の危機で、江西省瑞金の赤軍根拠地に移り長征を経て1935年10月に陝西北部に到着し、その後ずっと北方に根を下ろして来た。にも関わらず、歴代の党首（含む事実上の最高実力者）には、南方の人が圧倒的に多く統治期間に占める比率も非常に高い。陳独秀（安徽）、瞿秋白（江蘇）、李立三（湖南）、向忠発（湖北）、王明（安徽）、博古（江蘇）、張聞天（上海<sup>59</sup>）、毛沢東（湖南）を経て、漸く北方出身の華国鋒（山西）が浮上したが、同じ北方出身の前の次期党首筆頭候補・王洪文（吉林）と共に政治生命が短く、任期半ばで彼を辞任に追い込んだ鄧小平（四川）の支配の下で、胡耀邦（湖南）に続いて2人目の北方人・趙紫陽（河南）も2年余りで総書記の座から下ろされた。世代交代は江沢民（江蘇）、胡錦涛（原籍安徽、上海出生）へと、又も南方出身者同士の間で行われた。

次期党首の候補として下馬評が高かった李克強も、陳独秀・王明・胡錦涛（原籍）と同じ安

徽の人である。胡耀邦・胡錦涛と同じ団中央第1書記を担当した「団派」（共青閥）が政治力学の要素で控えた故か、第17回党大会で誕生した指導部の中で「太子党」の習近平が最有力候補の座に就いた。彼の原籍は父・習仲勳（副総理経験者）の故郷・陝西省富平県であるが、父の党中央宣伝部長在任中の1953年に北京で生まれた。「陝西は根、延安は魂」と自称した帰属意識は共青団的な情熱にも負けないが、69年から6年間も陝西の延川県の農村で思想改造の為の労働・定住をさせられた体験も背景に有る。75年の清華大学化学工学学部入学は生地及び正常な人生への帰還と言えるが、国務院・中央軍事委員会の弁公庁で耿飈（湖南人。78年3月-82年5月副総理、79年1月-81年7月軍委秘書長）の秘書（79-82）を務めた後、志願で河北省正定県の党委責任者に成った。型破りの志向は「大欲は無欲に似たり」と言う様に、福建省→浙江→上海→中央という東南沿海の北上・昇進を導いたが、対抗馬と照らし合わせれば興味津津の共通点が目に付く。

李克強は1978年北京大学法学部に入り習と其々2大最高学府に在籍したが、団中央第1書記（93-98）の後の地方責任者としての勤務地は河南、遼寧であった。南方出身者が北方の2つの重要な省を治め、原籍・生地とも北方の習は東南の富裕地域の長に任命されたのは、人間的な厚みを生かし且つ増やす<sup>たすき</sup>交差人事と思える。対立・統一の陰陽調和を尊ぶ中国では、「男人女相・女人男相」（男の人は女の相貌を持ち、女の人は男の相貌を持つ）と共に、「南人北相、北人南相」（南方人は北方人の風貌を持ち、北方人は南方人の風貌を持つ）が理想的とされる。貴人に多い「男人女相」の典型と言える毛沢東・周恩来は、朱鎔基の様相や気質に見える「南人北相」の観も有り、気性が荒い故に同志から「独裁者」と酷評された陳独秀も北方的な激しさが目立った。党首・準党首の中の元々少ない北方人の稀に見る「南相」の例として、武骨・磊落の父親と対照的な温厚・含蓄の風格が漂う習近平が思い浮かぶ。毛が自分の故郷・韶山県そして湖南省の党委書記を務めた華国鋒に後継させたのは、前の王洪文の場合と同じく南北に跨る幅広さへの期待も潜んだのかも知れないが、彼の囑託に背いた2人の限界は内面まで「北人北相」に留まった<sup>とど</sup>処にも有ろう。

江沢民も朱鎔基と同様の東北、北京での長い勤務経験が無ければ、大抜擢及び13年に亘った在位は果たして有り得るうか。胡錦涛は団中央から転出し最も貧困な貴州省と最も厄介な<sup>チベット</sup>西藏自治区に赴任したが、辺境・少数民族・窮乏という困難が重なる貧乏籤が逆に大出世に繋がった。江の後継者として彼の政治局常務委員会入りを指示した鄧小平は、師・胡耀邦への義理堅さや拉薩暴動鎮圧（1989年3月）の果敢さに見る品格・統治力を評価した<sup>60</sup>が、清華大学在学・勤務（1959-68）後に北方の極貧地域・甘肅省の<sup>ダム</sup>堰堤建設現場で鍛えた「南人北相」の賜物とも取れる。誕生日が「6.1」国際児童節に当る習近平に対して、胡錦涛は1942年の<sup>クリスマス</sup>降誕節（12月25日）に生まれたが、当局が公表したこの2人の公式の履歴には誕生日も出生地も伏せてある<sup>61</sup>。毛、鄧、江、胡の出身地の第1、2世代の湖南・四川と第3、4世代の江蘇、

「毛沢東<sup>コンプレックス</sup>情結」と「北京<sup>コンプレックス</sup>情結」——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）（夏）

安徽/上海は、党首・元老が輩出した中南—西南と華東の2大地域群に当て嵌まった天の采配である。胡錦濤の原籍と生地は陳独秀の出身地と中共の発祥地に吻合するが、上海出身や上海<sup>ゆかり</sup>所縁の党首の在任期間の合計の長さを感じられる。

張聞天は長征途中の1935年1月の政治局拡大会議（於・貴州省遵義）で最高責任者に推され、43年3月の毛沢東の党主席就任までその座に居たが、38年11月に共産主義<sup>コミンテルン</sup>国際の意思に従って主宰の大権を毛に秘密裏に譲渡したので、名義上の8年ではなく実質的な3年と看做そう。胡錦濤は上海で生まれたものの、公式略歴では原籍の安徽の人とされるし、4歳から大学進学まで江蘇省泰州市で多感な年頃を過ごしたので、2期10年の「上海元素」の含量を1/3弱の3年分としよう。江沢民は正真正銘の揚州の人であり、第15期中央（1997-2002）政治局常務委員会の7人の中で、党首の生家と次期党首の曾ての居住地・泰州と李嵐清の故郷・江蘇省鎮江市は、互いに約25-50<sup>キ</sup>しか離れていない小さな三角を成すが、この地縁と関連する「史縁」（歴史・経歴の所縁を言う造語）として、江沢民は上海交通大学卒業（1947）後に上海で工場等の管理職等を担当し、長春第1自動車製造工場への転勤（56-62）を経て再び上海に戻り、「文革」初期に中央官庁に入り更に北京から上海市委書記に赴任した。江が執政した13年間の上海所縁分をその足跡に応じて1/3弱の4年とすれば、上記の割引計算で約10年という結果に成る。全国に占める上海の面積・人口の微々たる比率（0.066%、約1.05%-1.4% [2004年の戸籍人口—常住人口比]）を考えれば、胡退任の時点で91年に及ぶ党史の中の重みが認められよう。而もこの3人は党内の毛時代の助走段階と、建国第3、4世代という重要な時期に在任した。

「將軍県」を生んだ「窮則思変」の原理と世襲人事が孕む「ベルサイユ化」の危険

中華人民共和国の歴史を振り返れば、末尾が9の西暦年には好く事変や大転換が起きた。1959年の西藏動乱・中ソ決裂・彭徳懷肅清、69年の中ソ国境戦争・林彪の次期領袖の地位確定、79年の改革・開放発足と中越国境戦争、89年の拉薩戒厳・天安門事件、99年の<sup>マカオ</sup>澳門帰還・初の宇宙飛行船打ち上げ成功、といった展開には非連続的な連続が見て取れる。2008年北京五輪と2010年上海万博の間の2009年も、建国の還暦であるだけに節目の意味を持つが、1桁の数の中の最大で「久」と同音（中国語でjiu）の9の年が乱を呼ぶという「<sup>ジンス</sup>魔呪」は、7月5日の<sup>ウルムチ</sup>烏魯木齊（<sup>ウイグル</sup>新疆維吾爾族自治区首府）騒乱で靈験を見せた。米国で「中国脅威論」の裏返し「<sup>はや</sup>米中二強（G2）」提携が離される程、中国は世界が刮目して見る政治・経済・軍事の大国として、繁栄・強盛の「<sup>ミサイル</sup>高速新幹線」で快進撃を続けているが、国慶節に天安門広場が核誘導弾等の最新鋭国産兵器の展示場と成り、閱兵式と群衆祝賀行進を成功させるべく全国から150万もの軍人・警察・<sup>ボランティア</sup>志願者等が動員されたのも、未来へ投げられた陰影を払拭させる意志が秘め

であった。

10月の17期4中総会で国家副主席・習近平の中央軍委副主席就任は見送られたが、次世代の軍・国・党の権力構図の方向性の一端を占う動向として、新疆暴動の半月後に軍委主席・胡錦濤が3人の「太子党」を上將に任命した。5人の有資格者の中で現行の最高位階級への昇格が決まったのは、副総参謀長・馬曉天、軍事科学院委員・劉源と成都軍区政治委員・張海陽である。1949年7月、8月に生まれた張、馬は共和国の「同齡人」(同じ歳/年代の者)で、1951年生まれ劉と共に鋭意推進中の軍幹部若返りの流れに合うが、「網民」等の在野世論や域外の報道機関では世襲批判が起きた。馬は空軍副司令(新階級も空軍上將)、解放軍国防大学校長を歴任し「軍の外交部長」の異名が有るが、父・馬載堯は解放軍政治学院教務長を務めた大校(上級大佐)で、岳父・張少華(中將)は軍委紀律検査委員会副書記経験者である。河南省副省長、武装警察部隊副政治委員、解放軍総後勤部同職を経た劉は、41歳で軍歴を始めて持ったにも拘らず異例の昇進を遂げたのは、故国家主席・劉少奇の末の息子である事と無関係ではない。前職が北京軍区副政治委員に過ぎなかった張の父・張震上將は、1952年に総参謀部作戦部長、78年に総後勤部長、85年に国防大学の初代校長、92年に軍委副主席に就任したが、華麗な経歴の中でも軍学校や軍委時代の人脈が97年の引退後も健在で、馬載堯が育成した高官群と同じく2世に恩恵を浴びせたと言う。

馬、劉、馬の公式発表の略歴では、河南巩義、湖南寧郷、湖南平江の人と成っている。上代の故郷の両省は正に中共党・軍の高級幹部の産地であるが、戦争から平和への過渡期にこの世に遣って来た3人とも、父親の従軍や勤務の居場所であった生地は原籍から遠く離れた。馬曉天は名前の「天津解放の暁」の意の通り天津落城(1月15日)の後に同市で生まれ、馬載堯が団(連隊)政治工作幹部を務めていた第4野戦軍49軍145師は天津戦役の主力であった<sup>62)</sup>。全国第4の「將軍県」・湖南平江の今迄の延べ64名の將軍の中で、張海陽は父親に次ぐ5番目の上將と成ったが、張震が彼に付けた名前は上海に射す新中国の陽光を意味する。第3野戦軍参謀長として上海攻略の勝利(5月27日)に貢献した後、過労を癒す為に市内の療養院に入っていた彼は、7月16日に夫人から電話で息子誕生の朗報を受け、咄嗟に出生地に因んだこの名を言った<sup>63)</sup>。建国後に生まれた劉源は当然ながら北京が生家であるが、人生の歩みを共和国とほぼ共にして来た3人の生まれは、奇しくも重慶の昇格(1997)まで3つしか無かった中央直轄市である。

元経済企画庁長官(1998年7月-2000年12月、小淵・森内閣)の作家・堺屋太一は2007年8月、翌月に1年未満の勤務を投げ出す結末に成った安倍晋三政権の体質的な欠点を、巴里から22<sup>キ</sup>離れた宮殿に因んで「バルサイユ化」と表現した。曰く、1626年にルイ13世が建てたこの狩猟用の別荘には、16世の時代に国王と取り巻きの貴族や官僚が集まり、優雅に暮らす余り庶民への関心を失ったが、今の閣僚も2世、3世議員が多く、その殆どが東京で生まれ育ち、

住んだことも無い父親の選挙地盤を継いで政界や国会に進出し、恵まれた東京に居て地方都市の厳しい状況の実感が持てない。本当の政治を行う為には「ベルサイユ」から出て、地方の本当の姿を見る必要が有ると力説した<sup>64</sup>が、同時代中国の党・政・軍・企業でも2世の躍進が目覚ましく、首都を初め大都会で出生・成長し原籍の地方都市や農村との絆が弱い輩が多い。但し、毛沢東時代の多難な経験に因って今は未だ「ベルサイユ化」に至る程ではない。親の威光で順調に出世街道を走り抜けたと見られがちのこの3上將も、「文革」の苦渋な試練や軍隊での辛い「下放鍛錬」（下積み修業）等の洗礼を受けた。

相対的に順風満帆だった馬曉天は満16歳直前の入隊から空軍畑一筋で、「文革」中に最年少の飛行団副団長と成り時代の寵児の観さえ有った。中央電視台（CCTV）で「共和国の同齡人」が主題と成る系列番組<sup>シリーズ</sup>を制作し、労働者・農民・軍人・学生等各界の代表が主役としてテレビで脚光を浴びたが、彼は軍の希望の星として選ばれ特集の名も「管制塔の兒童団」であった。それでも航空学校教官、部隊や軍区の長への叩き上げは、肉体的・政治的な危険が付き纏う棘の道であった。空軍操縦士<sup>パイロット</sup>は蒋介石時代と同じく「天之驕子」（天の寵児）と言って能いが、厚遇を受ける身分に成る前の大飢饉の記憶は彼の「ベルサイユ化」を拒む力が有る。「良將方能育虎子」（良き將軍こそ虎の[如く立派な]子を育成できる）と題する馬載堯の戦友の回想に拠ると、1960年代初め上京の際に海軍後勤部の戦友に御馳走を手配させ馬一家を奢った時、親子7人とも栄養不良に陥り子供たちは珍しく豊富な食事を前に待ち切れぬ様子であったが、礼儀正しく大人が箸をつけてから箸を伸ばした。その瞬間、僅か11-12歳の曉天は突然、「楊伯父さん、今日は腹一杯食べても能いですか」と訊ねた。

当の姚天成（広州軍区砲兵政治部主任等を歴任）が感涙を溢し<sup>こぼ</sup>そうに成ったこの逸話<sup>65</sup>は、建国世代とその子女たちの苦勞人の宿命を感じさせる。鄧小平・江沢民・胡錦濤が閩兵の際に放った掛け声の「同志們、辛苦了！」（同志諸君、ご苦勞さま）は、慰勞の常套句でありながら現実の辛酸・苦渋を言い得て妙である。馬の原籍・巩義市は省都・鄭州と洛陽の間に在り、1990年代以降は河南及び中・西部地域の県・市の総合的な実力順位<sup>ランキング</sup>で常に最上位に出たが、1959年後半から3年続いた「國民經濟困難時期」に河南の信陽地区で100万人以上も餓死した。同省は安徽省と並ぶ全国最大級の「重災区」（被災甚大地域）であるが、10大「將軍県」の江西3、湖北・湖南・安徽各2、河南1はこの文脈でも妙に納得する。

100人以上の將軍が輩出した民国の「將軍県」は、浙江省諸暨・湖南省醴陵・安徽省合肥と言われる<sup>66</sup>。共産党の「將軍県」とは湖南・安徽2省が重なるものの県（市）が違い、蒋介石の故郷・浙江に1県も無い事も興味深い。諸暨の突出ぶりは同省人を重用する蔣の選好が有る一方、北方からの移民が多い土地柄に因る武勇の遺伝子の所産でもあると言い<sup>67</sup>、梁山泊好漢と同数の108人<sup>68</sup>は山東の武人多出の伝統を連想させる。紹興市管下の同県（1989年に市に昇格）は春秋時代の越国の都で、中国史上の伝説的な「4大美人」の筆頭・西施の故郷として

も知られる。姚文元の父親・姚蓬子（作家・出版社経営）もその地の人文的な香りの薫陶を受けたが、彼の投機的な処世術や粗野な気性<sup>69)</sup>は上海生まれの息子にも継がれた。1972年に江青の伝記の取材の為に訪中した米国の歴史研究者・ウィトケ准教授は、宴席で姚が箸で鴨の舌を撮み強引に彼女の口に運んだ無作法に驚愕と不快を覚えた<sup>70)</sup>。極左思潮を鼓吹する姚文元の怪気炎は同じ諸暨出身の俞秀松にも見られ、上海共産主義小組の創設成員の中で俞は暴力を鼓吹する力説が目立った。

「5.4運動」の際に杭州第1師範学校に在学中の彼は杭州の学生運動の領袖と成り、1920年に北京大学哲学学部での聴講を経て李大釗の推薦で上海に赴き、上海共産主義小組成立の翌々月（同年8月）に上海社会主義青年団を結成し書記を務めた。25年に成立した中国共産主義青年団の前身は22年に同団から派生した中国社会主義青年団なので、俞は「共青閥」の初代領袖と「上海閥」の大先輩と言っても過言ではない。現に、25年に共青団総書記に就任し建国直前に団中央名誉主席に推挙された任弼時（党内序列第5）は、20年9月に上海共産主義小組が社青团臨時中央事務所の所在地で創った上海外国語学社（学習塾）の第1期学生に成り、準備段階に在った中共のこの最初の幹部養成学校の秘書を務める俞の紹介で社青团に入った。無政府主義者からマルクス主義者に転じた俞は学者に成る夢を捨てて、世間から唾棄・罵倒されても構わず革命家の道を選ぶと宣言した。社会改造の最良の方法は最大限に混乱に陥らせることだという彼の主張は、安定志向の強い上海では共鳴を呼び難く、資産階級・中産階級の子女の多い復旦大学では「学生政治暴動」への反発が起きた。隣省や他郷から来た外来の学生等の強烈な反逆精神や過激傾向は上海人の差別意識にも因ったと言う<sup>71)</sup>が、出身地や原籍が「外地人」（余所者）ばかりの「4人組」の上海での猪突猛進も似た要素が有ろう。

同小組の陳望道（後に復旦大学の教授と建国後の初代学長）も浙江（義烏）人で、中共上海地方委員会初代書記を務めながら陳独秀と決裂し脱党（1923）に至ったのは、「紅頭火柴」（頭の赤いマッチ）という渾名<sup>あだな</sup>が示す強烈な個性の衝突に起因した<sup>72)</sup>。仲の悪い者同士が同じ場所に居合せる事や敵・味方が共通の困難や利害に対して協力する事に言う「呉越同舟」は、『孫子兵法・九地』の「呉人与越人相惡」（呉の国の人と越の国の人互いに憎しみ合う）に由来したが、呉（江蘇）と越（浙江）の相異は前者の柔軟と後者の文字通りの激越にも有ろう。「七山一水二分田」（7割までが山地、1割が水〔川や湖〕、2割が平地）と言われた昔の浙江は今ほど富裕ではなかったが、秦始皇25年（紀元前222）に県が設立した諸暨は農業等の発達に因り、民国時代に同省の「1等県」と位置付けられた。歴代の傑出した人物には軍人も文人も科学者も多い<sup>73)</sup>。中共の「將軍県」の著名人には武人が文人より目立ち、窮乏の故に鬪争心・戦闘力が強い傾向が見取れるが、最終的には湖北黄（紅）安を最大の「將軍県」とする中共軍が天下を取った。興味深い事に、民国の3ヵ所は孫文が言った中国的な個人主義の特質である「散沙」（バラバラな砂）の分布にやや似ており、中共軍の場合は地続きの数省と「元帥省」の四



川を含めて強い結束の形態を成す。

元より中共の開国将軍の最低の資格である副軍団長は、民国の場合の旅団長より2級（副師団長・師団長）上に当り、戦歴の量（期間）・質（熾烈度）も同日に論じ難い<sup>74)</sup>が、文の要素の薄い「將軍県」群の鉄砲の政権誕生に対する貢献度も格別に高い。民国と共和国の将軍の主な揺籠が同居する安徽は中共初代党首の故郷であり、陳独秀は机を敲いて人を罵る「発火」（怒り出す）の癖で同志から敬遠され<sup>75)</sup>、陳望道と好一對の「紅頭火柴」とも言えるが、硝煙が消えた戦後でも同省では決死の変革に挺身する血脈が続いた。朱鎔基の直系18代先祖と言われる朱元璋<sup>76)</sup>の出身地・安徽省鳳陽も乞食が多い赤貧県で、反旗を翻し天下を取った明太祖の故郷で1978年末に全国農村初の生産責任請負制の実験が血判状の誓いを以て敢行された<sup>77)</sup>のも、窮乏が変革を招き逆境が奮起を促す原理に合致する。

国難が重く押し掛かった河南・安徽は奇しくも、1955年7月に安徽省都・合肥で生まれた（原籍は同省定遠県）李克強で結ばれる。彼は父・李鳳三が50年代に県長を務めた鳳陽の人民公社で4年間（1974-78）労働に従事し、1998-2003年に河南で副→正省長・党委書記を歴任し、「三農」（農業・農村・農民）問題や経済成長の難題に挑んだ。彼は43歳を以て共和国史上最年少で唯一博士号（経済学、1995年取得）を持つ省長に成ったが、劉源の同省副省長就任（1988）は全国最年少の記録を作り、少将（武装警察）付与の41歳も階級制度導入（1955）の初回対象者を除く記録的な若さである<sup>78)</sup>（唯一並ぶのは前年の1991年の許其亮〔山東人、2007年に上将・空軍司令に昇進〕）。李は2000年の洛陽の商業高層建築物・焦作の映画館の火災（其々309人、74人死亡）、03年の輸血起因の後天性免疫不全症候群感染、04年の鄭州大平炭鉍瓦斯爆発（148人死亡）等の事故で、幸運にも問責の危機を乗り切ったが、多難な土地柄が改めて浮き彫りに成った。

劉源は逆に災厄の歴史を承知で河南に赴任したのであり、何しろ父・劉少奇が1969年に監禁の身で開封に移送され間もなく悲惨な死を遂げた。国家主席の息子として彼は中南海で育ち、「文革」元年の国慶節に国旗護衛隊の一員として閱兵式に参加したが、その時に既に10年動乱の間の同世代の中の最大級の転落が足音を忍ばせて近付いて来た。父に党籍剥奪・公職追放の厳罰が下された68年に彼は一旦服役したが、忽ち除隊され山西省山陰県の農村で思想改造的な労働・定住を強いられた。82年に北京師範学院歴史学部を卒業した後も河南を勤務地を選び、新郷県七里營人民公社副主任を経て同県副県長、県長へと経歴<sup>キャリア</sup>を積んだが、進んで中央官庁から華北の農村に「下放」を志願した習近平の決断と似通う。

毛沢東の「人民戦争」の原理には「農村から都市を包囲する」と有り、この2人と李克強の出世も農村での統治経験の中央入りへの寄与を物語っている。それにしても、劉源の「新長征」の起点は時機・場所とも意表を突いた。七里營は毛が1958年8月6日に全国で最初に視察した人民公社であり、「人民公社好」（人民公社は素晴らしい）という激励で各地の公社設立熱<sup>ブーム</sup>

煽った地に他ならない。改革・開放後は政策転換に伴って人民公社は実質的に機能しなくなり、82年の憲法改定に由り政社分離の方向で解体に向い、第8条に出た「人民公社」も93年憲法から消えた。言わば風前の灯に飛び付いた挙動は時代遅れや逆行の印象が持たれる上で、父親の名誉回復の翌々年、毛の一連の失政を否定する党中央決議が公表された翌年に、敢えて毛所縁の経済「盲進」（盲目的な猛進）の原点に拘ったのも摩訶不思議である。何故なら、毛はその号令を発した8年後の1966年8月5日（8期12中総会期間中）、「砲打司令部——我的一張大字報」（司令部を砲撃せよ——私の大字報 [壁新聞]）という劉少奇打倒の宣言を公表した。劉の未亡人・王光美は2004年に子女一同と毛の子女・親族との懇親を設定し、同年の日露戦争勃発100周年の際の過去の敵同士の後裔の交流と同じく、恩讐を超える歴史的な和解を世間に演出したが、38年に亘る不仲・断絶が逆に映し出された。

毛と湖南同郷の初代後継予定者・劉は其々4回、6回結婚したが、前者が1938年に延安で、後者が47年に河北省平山県で娶った最後の妻は、揃って彼等が目指した政権基盤地域の出身である。劉夫妻の受難の陰には江青の陰湿な嫉妬が有り、山東の小さな町で小学5年を以て学歴に終止符を打った彼女は、上海での女優活動を自慢できても、北京生まれで高官の父や実業家の兄を持ち語学堪能の王光美には敵わない。国際化時代を先取りした王の洗練された知性は、新しい首都の文化的な奥深さを感じさせる。朝鮮半島の「南男北女」（南には美男が多く、北には美女が多い）と別の意味の「南男+北女」は、周恩来と鄧穎超（河南人）、胡錦濤と劉永清（北京人）の組み合わせも同様である。劉永清は重慶の高中を卒業後に清華大学に入り級友の胡と結ばれたが、王光美も北京の名門大学を出た才媛である。夫・劉が迫害で逝った後も彼女は開国総理並みの忠誠を以て「毛主席の学生」と自称した<sup>79)</sup>が、劉源の七里営公社行きと通じる「毛沢東情結」や毛自身も持った「北京情結」は、過去・現在・将来の中国の政治文化を探求する鍵言葉に成って来る。

## 注釈

- 1) 「使用頻度が最高の英語名詞は“time” オックスフォードより」, 時事通信/CNN.co.jp, 2006年6月22日。「最もよく使う英単語は“TIME” オックスフォード大調査」, 共同通信, 同23日。
- 2) 小学館『日本国語大辞典』第2版第11巻(2001年)には、「半時間」の項が有り、用例は次の通りである。「\*彼日氏教授諭(1876)〈ファン=カステール訳〉一五・附録「既にして面晤すること僅に半時間, ポットル深く其動作言談に服し」\*あひゞき〈二葉亭四迷訳〉“日没にはまだ半時間も有らうに”」
- 3) 角山栄『時計の社会史』, 中公新書, 1984年, 6, 13頁。
- 4) 織田一朗『日本人はいつから〈せっかち〉になったか』(PHP新書, 1997年), 第I章「日本の“時”の始まりから江戸時代」, 第II章「明治の改暦」。
- 5) 「時鐘」は中国語では「掛け・置き」時計や時報の意として好く使われ、「一控制」(時刻制御)等の複合語・用法が色々有るが、日本では今や使用頻度が低く、辞書に載っている「一番兵」(軍艦等で時刻報知の鐘を打つ任務の兵)も、帆船時代から艦艇の象徴と看做されて来た時鐘を打って艦内に時を

告げる仕組みの形骸化に伴って、実用的な用途が殆ど無くなった艦船の時鐘と同じく、歴史の遺物や記念物に化した観が有る。船乗りとしての心・技・体を養う意味で今でも所定の時間に鳴らす練習艦も有ると言うが、興味深い事に、甲板時計に基づいて30分毎に打つ従来の流儀は、0時30分の1点鐘に始まって8点鐘で1巡し、1日で6巡するものだが、「○点鐘」は中国語で毎正時を表わす言い方である。

一方、日本語の「時報」は『広辞苑』第6版（2008年）の語釈の通り、「①その時々<sup>マダマダ</sup>の出来事などの報知。また、それを掲載する雑誌類。“株式—”②正確な時刻を放送その他で広く知らせること。“正午の—”の両義だが、②は中国語で「報時」（時刻を報知する）と言ひ、中国語の「時報」は①に近いながら新聞（「報紙」）類に用いる（例えば *The New York Times* は『紐約時報』）。

- 6) 三戸裕子『定刻発車——日本の鉄道はなぜ世界で最も正確なのか?』, 新潮文庫, 2005年, 54-55頁。
- 7) 小学館『日本国語大辞典』（同上）には「半百」は有り、日本の用例として先ず「\*菅家文章（900頃）六・北堂文選竟宴、各詠史得乘月弄潺湲“半百行年老 尚書庶務繁”」が出て、最後に「\*狂歌・近世商賈尽狂歌合（1852）“としは半百に過たり”」と有り、続いて「\*白居易・戊申歲暮詠懷詩“窮冬月末兩三日、半百年過六七時”」と漢籍の例が挙げられた。
- 8) [韓国] 李御寧の『“縮み”志向の日本人』（学生社、1982年）の中国語版は、『日本人的縮小意識』（張乃麗訳、山東人民出版社、2003年）であるが、本稿筆者の訳語の選択肢には「凝縮」「濃縮」も有り、凝り性的な拘りが字面に出る前者を選好する。
- 9) 日本語にも「一半」が有る（『広辞苑』第6版の語釈は「二分したものの一方。なかば。“一”の責任は当方にある」）が、同じ意味の「半分」を好む処が日本的である。
- 10) 山折哲雄「“人生80年” 死生観見失う 病と老いに振り回され」, 『読売新聞』, 2010年8月15日。
- 11) 松田賢弥『無情の宰相 小泉純一郎』, 講談社, 2004年, 20-23頁。
- 12) 毛沢東は1949年初めに党中央城市（都市）工作部長・王稼祥に首都選定に就いて相談し、上記の見解を聞いて我が意を得た思いで賛同した。（原非・張慶編著『毛沢東入主中南海前後』, 中国文史出版社, 1996年, 281-282頁）王は赤軍長征中の1935年1月の政治局拡大会議（貴州省遵義）で毛沢東・周恩来と並ぶ3人軍事指揮小組（グループ、執行部）の一員であり、建国後は初代駐ソ連大使、外交部副部長、党中央対外連絡部長を歴任した。
- 13) 「原籍」は先祖が籍を置いていた処を指し、「寄籍・客籍」（寄留先・寄寓先の籍）と区別する概念である。日本の「本籍」は現実の住所と関係無しに、何処に定めても構わず、変更（転籍）も可能であるが、中国の「原籍」は自動的に「祖籍」で決まり、恣意の指定・変更は出来ない。但し、居住地での「寄籍」は子女の「原籍」と成る傾向が有る。
- 14) 「域外」は中国語の「境外」に対応する言葉として、本土以外を指し「国外」とは微妙に違い、範疇は外国の他に台湾・香港・澳門も含む。北京五輪聖火中継の「境外」行路の5大陸1巡の終点も、既に中国に返還された香港・澳門である。3地域に対する主権への意志・敏感の強さを思えば不思議な気もするが、「境」は川端康成の『雪国』の冒頭の群馬—新潟間の「国境」の様に、国境ならぬ国内行政区の境界線とも取れる。因みに、広東省と地続きの2特別行政区の「境外」扱いを考慮して、本稿筆者は「中国大陸」を政治的な文脈に於いて「中国本土」と記す。
- 15) 首都鋼鉄集團の子会社で、主として鋼材の生産・貿易に従事する。1985年に設立し、91年に香港証券取引所に上場し、97年に新設した恒生香港中資企業（紅籌股＝レッドチップ）指数の代表銘柄に採用された。
- 16) 眉間に向けて撃った銃弾が頭を貫通して真っ直ぐ後頭部へ抜けた弾道は、かなり不自然な体勢を示唆

し、一部で他殺説が流れた。4月10日付の『北京青年報』の記事は、屈原は自殺ではなく政敵の放った刺客に殺されたとの仮説を以て、王の死は謀殺や追い込まれた結果かと暗示した。(上村幸治『中国権力核心』, 文芸春秋, 2000年, 261-262頁)

『華人社界』誌(党中央統一戦線部主管)編集長等を歴任した作家・陳放は、首都首脳汚職事件の内幕を衝く実録小説『天怒——市長要案』([香港]太平洋世紀研究所, 1997年)の中で、常務副市長・何啓章がホテル社長・焦東方とその身辺警護人の強制で拳銃自殺をさせられる、という疑惑説に基づく場面を迫真に描いた。(507-511頁。日本語版[訳者名未記載, 構成=青木隆, リベロ, 1998年], 下巻454-461頁)1995年5月3日の設定は実在の4月4日に近く、焦の父・鵬遠(市党委書記)は陳希同を原型にしたので、問題作として刊行直後に発禁処分を受けた。

- 17) 首都鋼鉄集団傘下の香港上場企業4社の1社で、1991年に上場し、主な事業は不動産賃貸・金融賃貸・映像制作である。天兎慧・石原享一・朱建榮・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編『岩波 現代中国辞典』(岩波書店, 1999年)の「鄧質方」では、「94年には香港の上場不動産会社の首長四方集団の総裁に就任」と有る(938頁)が、上村幸治『中国権力核心』に曰く、「周北方は首鋼の香港子会社“首長国際”“首長四方集団”の会長も兼務していた。さらに、四方集団は鄧小平の次男鄧質方と取引があった。」(255頁)鄧質方は上海四方集団の会長として首都鋼鉄等と連携して、香港の上場企業「開達投資」を買収し「首長四方」に改称したとされる。
- 18) 王宝森の出身地も周北方の生地も、各種の人名辞典どころか<sup>インターネット</sup>国際電脳網情報にも見当たらない。今後も引き続き調査するが、後者に関しては父親の当時の勤務地や同年代の類似の場合から北京生まれと推測できる。
- 19) 枚挙に暇が無いが、例えば高杉良の実録小説『大脱走——石川島播磨重工に造反した80人のサムライたち』(番町書房, 1983年)や、2005年7月5日、8月8日の衆、参議院採決で党議拘束を顧みず郵政民営化法案に反対に回った大量の自民党議員の「造反組」が有る。一方、満82歳日前の2010年8月10日に背任容疑で逮捕された元衆院議員(自民党所属)・浜田幸一は、曾て「元ヤクザ」の自称らしい「政界の暴れん坊」ぶりを発揮し国会の「武闘派」の異名が付いた。彼は「任侠」稲川会の初代会長・稲川聖城への尊敬を公言して憚らなかつたが、「武闘派」は暴力団や暴走族の抗争指向にも当然使える。
- 20) 佐々淳行『東大落城 安田講堂攻防七十二時間』, 文芸春秋, 1993年, 147頁。
- 21) 大下英治『民主党政権』, KKベストセラーズ, 2009年, 107-108頁。名指しで叱咤された4人衆は、広報委員長・野田佳彦, 国会対策委員長代理・安住淳, 政務調査会長代理・長妻昭, 同・福山哲郎。
- 22) 立花隆「小沢一郎 “新聞將軍”の研究」, 『文芸春秋』2009年11月号, 105-107頁。
- 23) 党中央・國務院の所在地・中南海の表玄関・新華門の両側に1967年から、「偉大的中国共産党万歳」「戦無不勝的(百戦百勝の)毛沢東思想万歳」という標語が掲げられたが、胡錦濤時代に成っても一部の知識人の違和感にも関らず撤去や更新の気配は無い。
- 24) 王光美・劉源等著, 郭家寬編『你所不知道的劉少奇』(河南人民出版社, 2000年), 日本語版(吉田富夫・萩野脩二訳『消された国家主席 劉少奇』, 日本放送出版協会, 2002年), 260頁。
- 25) 佐々淳行『東大落城 安田講堂攻防七十二時間』, 124-127, 26頁。
- 26) 佐々が語った「背後霊」を感じさせる様に、89は奇しくも昭和の終焉と彼が「大葬の礼」の警備の指揮を最後に退官した西暦年の下2桁である。
- 27) 佐々淳行『連合赤軍「あさま山荘」事件』, 文芸春秋, 1996年, 294頁。
- 28) 佐々淳行『東大落城 安田講堂攻防七十二時間』, 104頁。

「毛沢東情結」<sup>コンプレックス</sup>と「北京情結」<sup>コンプレックス</sup>——当代中国の政治文化の根底の基本線・中軸線（上）（夏）

- 29) 「賊」に纏わる逸話として、1971年6月に訪中した公明党代表団と中国側の共同声明起草委員会の議論で、公明党側は「蒋介石傀儡一味」という表現を拒絶し、政治的な文書に「傀儡一味」と書くのは山賊みたいなもので品が無いと主張したが、論戦は「山賊」の概念定義に飛び火して、侃々諤諤、深夜から明け方に及び、<sup>らち</sup>埒が明かないと見た中国側は『言海』『広辞苑』を開いて指し示し、「お国の辞書にもちゃんと書いてある」と言って日本側を閉口させた。（毎日新聞政治部『安保——迷走する革新』、角川文庫、1987年、75-76頁）
- 一方の「罪人」に関しては、世界中の共産主義者が愛唱する「<sup>インターナショナル</sup>国際歌」の早期の中国語版（蕭三・陳延年訳、1923）の冒頭は、「起来、飢寒交迫の奴隷！起来、全世界上の罪人！」（起て、飢寒に苛まれた奴隷たちよ！起て、全世界の罪人たちよ！）で、1962年に専門家集団が修訂した現行版では「罪人」は「受苦の人」<sup>しいた</sup>（虐げられた人々）に直された。日本では初期版（小牧近江訳、1922）は「起て！呪われし者！起て！飢えたる者！」とし、最も広く流布する佐々木孝丸・佐野碩訳では、「立て飢えたる者よ 今ぞ日は近し！」と成る。
- 30) 同じ流血を招いた「鎮圧」と「弾圧」の使い分けは、第1次天安門事件の民兵に由る角材等での殴打と、第2次天安門事件の軍隊に由る実弾発砲と字面で対応する為である。
- 31) ユン・チャン（張戎）＋ジョン・ハリデイ MAO（2005）、日本語版（土屋京子訳『マオ 誰も知らなかった毛沢東』、講談社、2005年）下巻505-508頁。
- 32) 中共中央文献研究室編、逢先知・金沖及主編『毛沢東伝（1949-1976）』、中央文献出版社、2003年、下巻154頁。
- 33) 産経新聞「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録』、産経新聞ニュースサービス、1999年、下巻247-250頁。
- 34) 注10に同じ。
- 35) 「満江紅・和郭沫若同志（郭沫若同志に和す）」（1963年1月9日）、竹内実訳（武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』、文芸春秋、1965年、386頁）。
- 36) 実際は警察庁が27日の執行予定を28日に延期した後又1日延ばそうとした処、閏年の2月29日に当るので殉職者が出たら4年に1回しか命日は来ないという佐々淳行の反対で断念した。（佐々淳行『連合赤軍「あさま山荘」事件』、213頁）
- 37) 此処で「悪漢等の」一団・一味、暴力団を指すgangは、[囚人・奴隷・労働者等の]群れ・仲間の意も有り、巡り巡って「<sup>インターナショナル</sup>国際歌」の中国語訳の中の「奴隷・罪人」（注29参照）や、中華人民共和国国歌「義勇軍行進曲」の冒頭の「起来！不願做奴隷の人們！」（立て！奴隷に成りたくない人々よ！）と繋がる。
- 38) 葉永烈『「四人幫」興亡』、人民日報出版社、2009年、上巻5頁。原籍・浙江の姚文元は出生・居住から半分の上海人と言えるので、上海人は1人もいないという著者の断言は、0.5人は有るという含みが無いなら疑問である。本稿では「純粋な上海人は1人もいない」と無難な限定を加えて、原籍も生地も上海という生粋の者の皆無を表わす。
- 39) 荀德麟「試論淮陰郷土文化対周恩来的影響」、『淮陰師範学院学報』1998年第3期。
- 40) 徐平『新中国首次軍銜制実録：1955-1965』（修訂版）、金城出版社、2007年、89頁。
- 41) 楊東平『城市季風——北京和上海的文化精神』（東方出版社、1994年）、日本語版（趙宏偉・青木まさこ編訳『北京人と上海人 攻防と葛藤の20世紀』、日本放送出版協会、1997年）95-96頁。
- 42) 江青は魯迅の原稿の持ち出しの件で戚本禹の罪は銃殺処刑に値すると口走ったが、気を揉んだ要因は1930年代の上海での不名誉な過去の暴露に繋がる事への懸念だとされる。昔の醜聞を隠滅しようという彼女の指図で「文革」初期の上海で、映画監督・鄭君里、男優・趙丹等が自宅捜査・監禁をされた。

- 43) 江青は建国初めに党中央宣伝部電影（映画）処長（局長と課長の間の役職）に就任し、1956年に更に党主席秘書（生活担当）に任命され副部長相当の待遇を得たが、同職の中でも其の党内の経歴・地位・権限等は、政治担当の陳伯達・胡喬木や機要（機密）担当の葉子龍、日常担当の田家英の比ではなく、公の活動も結婚当初から党中央の取り決めて厳しく制限された（1962年に劉少奇夫人・王光美への対抗心から毛に強請り、共にインドネシア大統領夫妻と会見し報道・写真を新聞に載せて、漸く表舞台に進出し公衆の注目を引くに至った）。1974年11月19日に江は毛宛ての手紙で、第9回党大会後の数年間に自分はほぼ「閑人」で任務を与えられていない、と暗に権限の増大を要請し毛に撥ね返されたが、政治局委員に成った当時に比べて「文革」前は「閑人」と言えよう。
- 44) 葉永烈『「四人幫」興亡』、上巻440-445頁。
- 45) 同上、478-479頁。
- 46) 力平『開国総理周恩来』、中共中央党校出版社、1994年、362頁；中共中央文獻研究室編、金沖及主編『周恩来伝（1949-1976）』上巻、中央文獻出版社、1998年、438頁；周秉徳『我的伯父周恩来』、遼寧人民出版社、2001年、206頁。
- 47) 高文謙『晩年周恩来』（『紐育』明鏡公司、2003年）、日本語版（上村幸治訳『周恩来秘録——党機密文書は語る』、文芸春秋、2007年）、上巻335頁。
- 48) 中共中央文獻研究室編、逢先知・金沖及主編『毛沢東伝（1949-1976）』、上巻771頁。
- 49) 同上、下巻1496頁。
- 50) 高文謙『晩年周恩来』、日本語版、上巻281頁。建国後に珍しく使う「毛潤之」で署名した事が特筆すべきで、内戦時代の闘志の再燃が感じ取れる。（「潤之」は毛の字<sup>あざな</sup>[男子が成年後実名の他に付ける別名]。元毎日新聞中国総局長の獨協大学教授に由る日本語版で「幼名」と訳したのは、元服前の「小字・小名」と誤認した事か）。
- 51) 同席した関鋒・姚文元に拠れば、毛は「為開展全国全面的内戦乾杯！」（全国の全面的な内戦を展開する為に乾杯！）と啖呵を切った。（閻長貴「毛沢東号召“開展全国全面的階級闘争”」、『炎黄春秋』[中国炎黄文化研究会主編]2008年第5期）公式の記載は『王力反思録』（[香港]北星出版社、2001年）の回想に基づいて、「内戦」ならぬ「階級闘争」とする。中共中央文獻研究室編、逢先知・金沖及主編『毛沢東伝（1949-1976）』では、「祝全国全面的階級闘争！」と成っている（下巻1462頁）。
- 52) 葉永烈『「四人幫」興亡』、上巻480頁。
- 53) 毛沢東は1966年7月8日に江青宛ての書簡で、「文革」発動の意図と展望を述べ、「天下大乱（を経て）、天下大治に至る」という青写真を描いた。
- 54) 葉永烈『「四人幫」興亡』、上巻1210-1213頁。
- 55) 同上、下巻1350頁。
- 56) 同上、中巻668-669頁。
- 57) 葉永烈『紅色的起点』、安徽教育出版社、2009年、201-203頁。
- 58) 本文で取り上げた面々の他、山東出身の「文革」派の要人には、于会泳（文化部長）、遼群（清華大学革命委員会主任）、魯瑛（『人民日報』編集長）、王効禹（山東省革命委員会主任）、劉結挺（過激武闘派として悪名高い四川省革命委員会副主任）等がいた。康生夫人・曹軼欧（党中央委員、康生弁公室〔事務所〕主任）も山東の人である。
- 59) 張聞天は1900年に江蘇省南匯県で生まれたが、今所轄の上海を出身地とする。『鄧小平文選』第2巻（人民出版社、1994年）の注釈にも、「陳雲、一九〇五年生、江蘇青浦（今属上海）人」と有る（431頁）。
- 60) 文思詠・任知初『胡錦涛伝』第2版（[香港]明鏡出版社、2002年）に拠ると、鄧は1992年党大会人

事で胡の大抜擢を江沢民に納得させ、評価の理由の第1が「品格が有り胡耀邦に対して情も義も有った」である。胡耀邦失脚を不公平に感じ批判に同調しなかった事が、解任劇の黒幕の鄧を逆に好感させた（伊藤正『鄧小平秘録』、産経新聞出版、2008年、下巻223-224頁）が、これも中国政治の複雑系の奇妙な現象である。2点目が「原則が有り、西藏分裂活動に対して容赦しない」、更に幅広い仕事の経験、西部に対する熟知、若さを挙げたと言う。又、國務院に先んじて自治区政府が戒厳令を敷き、胡が鉄兜を被って装甲車両に乗り鎮圧の陣頭に立った事を聞いて、鄧は「中国に必要なのはこの様な人物だ」と絶賛した。（清水美和『「中国問題」の核心』、ちくま新書、2009年、103頁）

- 61) 当局発表の胡錦濤の略歴は、「1942年12月生、安徽績溪人」と言う。『フリー百科事典 ウィキペディア』（Wikipedia 日本版）、『維基百科，自由的百科全書』（同中国版）の「胡錦濤」には、「出生：1942年12月21日 江蘇省」「上海に生まれ、江蘇省姜堰市で育つ」という、矛盾し且つ不正確と思われる記述が有る。（本稿執筆中 [2009年10月4-22日]、校正・補筆時 [10年9月15-22日] 閲覧。以下、<sup>インターネット</sup>国際電脳網情報は同じ）自由編纂者たちが気付いていない権威有る情報として、2007年12月25日付『産経新聞』に「金総書記、胡主席に祝電」との題で共同通信社電（北京）が報じられた。「北朝鮮の朝鮮中央通信によると、金正日総書記は24日、中国の胡錦濤国家主席（共産党総書記）の65歳の誕生日に際して、祝電を送った。」金は65歳に成る胡に対して初めてこの類の祝電を送ったが、朝鮮当局の発表は間違はずが無い。

習近平の誕生日は Wikipedia の日本版・中国版に拠るが、公式発表は「1953年6月」のみと成る。

- 62) 「新科上将馬曉天的父親馬載堯」（『北京青年報』報道）、博訊新聞網2009年7月21日転載。
- 63) 凌輝「平江籍上将張海陽的桑梓情」、平江县政府網2009年7月24日転載（『長江信息報』より）。当県から出た上将は張氏親子の前に、蘇振華・傅秋濤・鐘期光がいた。
- 64) 「なるか再生」<sup>1</sup> 堺屋太一氏 ベルサイユ化抜け出せ、『読売新聞』、2007年8月17日。
- 65) 姚天成「良将方能育虎子」、姚天成的博客（BLOG）、2007年1月14日。当ブログ（[blog.sina.com.cn/yaotiancheng](http://blog.sina.com.cn/yaotiancheng)）は故人逝去（1995）後、遺族等が開設し生前の回想・資料等を公開するものである。
- 66) motion724「民国三大將軍県」、motion724の主页（<http://my.tianya.cn/2283853>）、2007年7月24日。浙江省青田にも90名の民国將軍が出たという附言に対して、俊如2006（ブログは現存せず）の書き込みは広西容県の77名を付け加え、<sup>イメベンション</sup> 閩毒客（<http://my.tianya.cn/12527142>）は醴陵の百名は国民党と共産党が半々を占めると指摘した。
- 67) 本稿筆者が立命館孔子学院副院長を兼務中の2009年10月20日、学院を訪問した諸暨出身の俞可平教授（中共中央編訳局副局長・北京大学中国政府<sup>イノベーション</sup> 創 新 研究<sup>センター</sup>主任）に「將軍県」の理由を訊ね、上記の教示を得た。
- 68) 陳侃章・何徳康編の諸暨籍国民党將領群の小伝が『浙江省文史資料選輯』第47輯（中国人民政治協商會議浙江省委員会文史資料研究委員会、1992年）に掲載された際、浙江人民出版社の編集部は「梁山泊108將」の連想を避ける為に2人分を削除し106人にした。93年の『国民党九千將領伝』（劉国銘主編、中華工商聯合出版社）には、108人分の完全収録が出来た。（楼祖民「明源詳流 去実存真——讀『中国国民党諸暨籍百將將領録』」、聯誼報 [浙江省人民政府新聞弁公室] 電子版、2007年9月8日。陳侃章「書寫的故事：『諸暨籍国民党將領伝』來龍去脈、浙江在線新聞網站、2009年2月20日」）
- 69) 葉永烈『「四人幫」興亡』、上巻417-421頁。
- 70) 殷天展「文革四十周年 才見紅都女皇」、[香港]『亞洲週刊』2006年4月30日号、45頁。
- 71) 楊東平『城市季風——北京和上海的文化精神』（修訂本）、新星出版社、2006年、116-117頁。同書の初版は日本語版（注40参照）が有るが、紙幅の制限に因る大幅な割愛で、第2章「京派」と“海派”

の二極対峙」にはこの件は見当らない。

- 72) 散木「陳独秀“家長制”作風与建党初期多人退党的考察」,『党史博覽』(中共河南省委党史研究室主管,月刊)2008年第5期。
- 73) 葉永烈『「四人幫」興亡』,上巻365頁。
- 74) 注66に同じ。
- 75) 注72に同じ。
- 76) 「媒体披露朱鎔基伝奇身世 乃朱元璋十八世孫」,星島環球網,2008年1月25日。
- 77) 1978年11月24日,曾て不作や貧困で餓死・脱出者が多く出た鳳陽県小崗村で,18の農家の協議で秘密裏に国有の耕地・生産用具等の生産手段を全世帯に分け生産責任(戸別経営)請負制を導入する事を決め,投獄覚悟で書いた血判誓約書は後に中国革命博物館に展示された。
- 78) 元国家主席・楊尚昆が劉源の少将授与を喜んで,「中国最年少の将軍と記念写真を取ろう」と提案した。(「劉少奇之子劉源憶楊尚昆:做好人才能做好官」,伝記網,2007年8月3日)
- 79) 1983年に毛沢東の生家旧居を拝観した後,「深く毛主席を追懐する 学生・王光美」と題辞した彼女は,評劇女優・新鳳霞に「私たちは皆毛主席の好い学生」と言ったが,旦那さんが毛主席に死に追い込まれたのに,こんなことを言って好くない,と反発された。(蔡詠梅「吳祖光一生的遺憾」,[香港]『開放』誌2003年5月号)

(夏 剛,立命館大学国際関係学部教授)



## “毛泽东情结”与“北京情结” ——当代中国政治文化的根基、枢轴之一（上）

20 世纪的中国每逢 1 / 4 世纪之交，都发生了转折性的政治、权力演变。经过毛泽东死后 1 / 4 世纪的改革开放，中国在新世纪的头个 1 / 4 世纪壮大而成世界第 2 经济强国。在展望这一阶段的国家指向时，位于中点的 2012 年中共领导核心换届即为重要环节。

2002、03 年江泽民半退、全退，开创了建党、建国后顶峰安稳交班的先例。第 3 代领导集团执政期间出现有关“上海帮”对“北京帮”的观测，当今更升级作“（共青）团派”与“太子党”相争之说。本文追溯“文革”中“上海帮”（多山东籍的“4 人帮”团伙）的兴衰，勾勒政治风云、历史长廊中的京沪“双城记”；进而以“南人北相，北人南相”的“吉相”理想，探讨历代及下届领导核心人物的素质；并通过对比“将军县”所体现的“穷则思变”原理，指出和近年来日本政界“凡尔赛宫化”类似的“官 2 代”趋势的征兆。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）

